
艦魂年代史外伝 ～陸海軍の絆 共に歩むべき道～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂年代史外伝 〱 陸海軍の絆 共に歩むべき道〱

【Nコード】

N3523G

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

日本の真珠湾攻撃で始まった太平洋戦争。緒戦は念入りに作戦を練った上に猛訓練を続けてきた日本軍が圧倒。連合軍はその破竹の進撃を止める術がなかった。そんな中日本軍は南方資源地帯の確保の為に重要拠点としてジャワ島を攻略しようと攻略部隊を派遣した。しかしそこへ連合軍艦艇が迫って来る。圧倒的な戦力を持つ日本艦隊は少数な上に傷ついた敵艦隊などに負けるはずもなかった。護衛を海軍に任せ、陸軍輸送船団は上陸に取り掛かる。だがそんな輸送船団に悲劇が襲い掛かった。これは当時世界屈指の不仲と言われた

日本陸海軍の知られざる絆と、それを行った一人の聖将、そしてそれを取り囲む艦魂達の小さな奇跡の物語である

序章 陸海軍の奇跡（前書き）

どうも皆さんこんにちは。最近はずっかり影が薄くなってしまった一応艦魂作家である黒鉄大和です。

実に一ヶ月ぶりの外伝ですが、今回は修正版ではなく完全オリジナル版です。

しかも、相当なマニアじゃないと知らないような小さな、しかしとても温かな物語です。

当時の日本陸海軍の不仲は有名ですが、それを少しでも払拭したある名将がいました。

これはその歴史に隠れた名将与、それを取り囲む艦魂達の心温まる物語です。

どうか皆さん、これから数日の間という短い間ですが、お付き合いをお願いします。

では黒鉄大和が送る久しぶりの艦魂年代史シリーズ、どうぞッ！

序章 陸海軍の奇跡

一九四一年十二月八日、日本は真珠湾攻撃を敢行し、今まで理不尽な圧力を仕掛け続けていたアメリカ、イギリスを始めとする連合国に対してついに開戦した。

米太平洋艦隊を真珠湾で、英東洋艦隊をマレー沖で粉碎した日本海軍はその戦力を惜しみなく各戦線に投入。性能が高い上に月月火水木金の猛訓練のおかげで錬度も高い圧倒的な強さの日本艦隊の前に連合国艦隊は次々に撃破されていった。

年が明けた一九四二年三月一日、スラバヤ沖にて米英蘭濠連合艦隊対日本海軍の壮絶な海戦が行われた。両軍合わせて約四〇隻あまりの艦隊が一昼夜に渡って大激突し、史上稀にみる大海戦となった。

結果は数、そして質で上回る日本海軍の圧勝。日本海軍は駆逐艦一隻大破、沈没艦なしという結果に対し、連合国艦隊はその戦力の半数を失い、残った艦艇もボロボロという状態であった。

連合国艦隊は司令官も戦死し、彼の残した最後の命令に従って残存艦艇は敗走した。

この海戦の後、駆逐艦『雷』^{いかづち}と工藤俊作艦長^{くふうとしゆく}による英軍漂流者救出が行われた事はあまりにも有名な話だ。

だが、この他にも日本軍の心温まる話があるのだが、それはあまりにも世間に知られていない。確かに敵兵を救助するという行為などに比べれば小さいものかもしれない。しかし、当時の陸海軍の不仲という戦争遂行において最悪な状況だった日本軍の中、その関係が全てではない事を有名にした話。

これはそんな陸海軍の絆と、そこに居合わせた艦魂達の物語である。

序章 陸海軍の奇跡（後書き）

と、あれだけ豪語しておいて短くてすみません。
この後すぐに本編の方を投稿しますので、ご勘弁を。
では第一章の投稿に取り掛かります。
ではです。

第一章 陸軍と海軍交われぬ想い（前書き）

という事で、今回から本編です。

今作の特徴は陸軍輸送艦の艦魂達が登場する事です。当然海軍側の艦魂も登場します。

陸海軍の不仲はもちろん艦魂達の領域にまで達しています。なので両軍の艦魂同士も不仲なのです。

そんな艦魂同士でも睨み合っ中、ジャワ攻略部隊は目的地、ジャワ島へと向かいます。

今回は主要キャラが次々に登場。黒鉄大和らしい艦魂作品が始まります。

では、最後までお楽しみください。

第一章 陸軍と海軍交われぬ想い

スラバヤ沖海戦に敗れた連合艦隊のうち、米重巡洋艦『ヒューストン』と濠軽巡洋艦『パース』はその戦いの第一戦で敗北。他艦よりも先に亡き司令官の命令に従ってバタビアに撤退していた。しかしすでにバタビアにも日本軍の脅威は迫っており、二隻は艦隊の再編成の為にわずか半日で出港した。その際に蘭駆逐艦『エヴェルトセン』が護衛に付く手はずだったが間に合わず、後方から追いかける形となった。

しかし『エヴェルトセン』はまだ続いていたスラバヤ沖海戦に巻き込まれ、沈没した。

二隻は護衛を失いながらも、目的地に向かって前進していた。

一方日本軍はスラバヤ沖海戦で連合艦隊を撃破した事で、すでに
に出撃していた西部ジャワ島を攻略の為に今村均中将率いる第十六軍を分乗させた五六隻の輸送艦で構成された輸送船団による輸送作戦が安全なものとなった。この陸軍輸送船団を護衛する為に日本海軍はスラバヤ沖海戦に参加していた別艦隊を途中から合流させた。その戦力は重巡洋艦『最上』^{もがみ}、『三隈』^{みくま}、軽巡洋艦『名取』^{なとり}、駆逐艦十三隻。輸送艦を含めると大艦隊にもなる。

西部ジャワ島攻略部隊はスラバヤ沖海戦で制海空権を獲得した海域を大艦隊を率いて堂々と進撃していた。

陸軍輸送船団の周りを海軍護衛艦艇が護衛する。まさに軍隊として本来の光景がそこにあったが、実際には日本軍の陸海軍不仲は世界的にも有名であり、この艦隊の中にも陸海軍の対立は少なからず存在していた。

そんな不仲な陸海軍の関係は何も人間だけではない。

艦魂、古今東西七つの海に伝わる船乗りの伝説。

艦魂は文字通り艦の魂であり、艦魂はその化身。言い方によって

は精霊のようなものだ。

大小どの艦にも艦魂は宿る。それは皆若い女の姿をしていて、通常の人間には見る事はできない神聖なる存在。

そんな艦魂同士であっても、陸海軍での不仲は存在していた。

そして、この陸海軍連合艦隊においても、それは例外ではなかった。

「司令官ッ！ 司令官ッ！」

しんしゅくまる

陸軍輸送艦（揚陸艦）『神州丸』の一室で、コーヒを片手に西部ジャワ島攻略の作戦書を読んでいた今村中将の下に、一人の少女が駆け込んで来た。あっちこっちにはね回ったクセツ毛が特徴で、そのクセツ毛の上から無理やり軍帽を被ったような出で立ちをした少女の名は神州丸。この輸送艦『神州丸』の艦魂だ。陸軍の輸送艦なので軍服も海軍のものではなく陸軍下士官服を着ているのも特徴だ。

「おお、神州か。どうしたんだそんなに慌てて？」

今村は然程驚いた様子もなく神州を見詰める。彼は艦魂が見える数少ない存在の一人。それも海軍軍人ではなく陸軍軍人。艦との接点はほとんどない人物だ。

部屋の中に慌てて駆けこんできた神州丸を見て、今村は優しく出迎える。今村は日本軍司令官の中において珍しいくらいに穏健派で、性格も優しく部下からの信頼はかなり厚い。まさに名将与謳われる人物だ。

そんな名将今村の前でしばし息を整えていた神州丸はようやく荒い息を終えて今村に対峙する。クリツとした瞳がかわいらしい美少女。それが神州丸だ。

「司令官ッ！ 大変なのでありますッ！」

「おう。大変なのは君の様子を見る限りわかるさ。で？ 何がどう大変なのか具体的な事を教えてほしいのだが」

「ハッ！ じ、実は現在我が艦の会議室で陸海軍艦魂会議が開かれ

ているのでありますが……」

今回の作戦はかなり重要な作戦である。その為、普段は滅多に交流しない陸海軍の艦魂同士も今回ばかりは話し合いを行って歩調を合わせていたのだ。だが……

「問題が起こった、と？」

今村はすぐに見抜いた。

「そうなのであります。現在陸海軍艦魂同士で対立。お互いに言い合っていて殴り合いのケンカになるかわからない状況でありまして……」

神州丸の報告に、今村は大きなため息をした。陸海軍の不仲は人間だけでなく艦魂の領域にまで及んでしまっているのだ。

「まったく、女が殴り合いのケンカをするなんて世も末だな」

「面目ないであります。陸軍側代表として輸送船団旗艦である私が何とか仲裁を行っていたのでありますが、海軍側の艦魂達の態度に仲間達が激怒してしまい、もはや私では手がつけられなくて……」

「それで俺を頼って来た、と？ 勘弁してくれよ」

苦笑いする今村に、神州丸は「そこを何とかお願いしますでありますッ！」と土下座してしまう。いつも真面目で真っ直ぐな神州丸。彼女が土下座するまで追い込まれていると理解した今村は「仕方ない」とため息しながら立ち上がった。

「案内しろ神州」

「は、はいでありますッ！」

神州丸はバツと起き上ると嬉しそうに笑い、今村を案内しようと手を握り

「……ッ!？」

突如顔を真っ赤にして慌てて放した。そんな彼女を見て今村は不思議そうに首を傾げる。

「どうした？ 転送するんじゃないのか？」

「わ、わかっていてあります」

神州丸はなぜか今度はふてくされたように唇を尖らせると、今度

は手を繋ぐずに光に包まれる。その光は今村をも包み込み、やがて収束して消滅。二人は部屋から姿を消した。

その頃、『神州丸』の会議室は紛糾していた。

長テールを境に陸軍側艦魂代表団と海軍側艦魂代表団がさまざまな罵声を言い合っている。いつこの境界線が破られるか、緊張一杯の状況だ。

「ドブネズミは黙ってなさいッ！」

そんな中、海軍側の先頭に立つて陸軍艦魂に罵声を飛ばしているのは軽巡洋艦『名取』の艦魂。右側に纏めたサイドテールと細メガネが特徴的な瞳が刃のように鋭い女性だ。

名取を中心に彼女の配下の駆逐艦の艦魂達も次々に罵声を飛ばす。だが、陸軍側だつて負けてはいない。

「黙れッ！ 腰抜け海軍の雑魚がッ！」

そう怒鳴り散らしたのは現代で言うちよつと長めなスポーツ刈りをした、一見すると美男子っぽく見える少女。輸送艦『佐倉丸』の艦魂で、陸軍側の頭だ。

「テメエら海軍なんて、俺達陸軍がいなきゃ何もできない腰抜けだろうがッ！」

「それはこっちのセリフよッ！ 私達がいなきゃ太平洋の島々なんて渡れないでしょ？ 歩いて太平洋を渡りたいなら渡れば？ ドブネズミ」

「んだとッ！ やんのかゴラァッ！」

「やってやろうじゃないのよッ！」

名取は軍刀、佐倉丸は銃剣を取り出して一触即発な雰囲気を作り振りまく。その影響か、他の陸海軍艦魂も武器を構えて睨み合っている。

いつ決闘になるかわからないという緊迫感の中、突然ドアが叩かれた。

「官姓名を名乗れッ！」

ドアの近くにいた輸送艦の艦魂が突然の部外者に怒鳴る。と、
「今村だ。ここを開けてくれないか？」

その声を聞いた途端、陸軍側の艦魂達の顔から一斉に血の気が引いた。海軍側の艦魂は首を傾げるばかり。

「い、急いでお開けしろッ！」

佐倉丸が怒鳴り、慌てて輸送艦の艦魂がドアを開けると、そこには自分達の直属の司令官である神州丸と間接的ながら最も自分達が尊敬している司令官、今村均中将の姿があつた。

「おお、すまん。おいおい敬礼はいいから、楽にしてくれ」

慌てて敬礼しようと立ちあがる艦魂達にそう言つて、今村は部屋に入った。すると、

「こ、この椅子をお使いくださいッ！」

「おお、ありがとう」

駆逐艦の艦魂が慌てて席を立て椅子を譲つて来た。まさか海軍側の艦魂も、自分達で言う所の艦隊司令長官クラスの中将である今村が訪ねて来るとは思つてもいなかったのだらう。先程までの勢いが完全に消えていた。それは陸軍側も同じだ。

席に座つた今村の横では、ムスツと仁王立ちする神州丸。そしてその背後には二人の少女が立っていた。

「まったく、仮眠を取つてたのに神州丸に叩き起こされて来てみれば、一体何をやってるのですかあなた達は」

「ふわぁ……私達、マレーやパレンバンの上陸作戦支援で寝てないんですから……ちょっとは寝かしてくださいよ……」

呆れたように言うの長髪に後頭部で白リボンを結んだ少女、重巡洋艦『最上』艦魂。その横で眠そうに目を擦っている同じく白リボンをツインテールで纏めた小柄な少女は最上の妹で重巡洋艦『三隈』の艦魂だ。二人で仮眠をしていた所を神州丸に叩き起こされて駆け付けたのだ。

互いの最高司令官が仲裁に入った事で、陸海軍の艦魂同士の言い合ひは案外簡単に終結した。だが、依然として名取と佐倉丸を中心

に二軍は睨み合ったままだ。この対立はかなり根深いようだ。それを見詰め、今村は疲れたようにため息する。

「まったく、君達は同じ名誉ある帝国海軍軍人だろうが。少しは仲良くしろよ」

「それは違いますぞ今村司令。私達と海軍を一緒にされては困ります」

「ふん。結局は陸軍の司令官じゃない。私達海軍は従う義務はないわ」

名取の発言に再び陸軍側が怒鳴る。そして海軍側もそれに応戦。再び陸海軍同士の罵り合いが始まってしまった。それを見て、今村はため息する。と、

「いい加減にしないさい名取。いくら先輩とはいえ、私がこの艦隊の最上級階級の艦魂だと忘れてもらっては困ります。これは命令です。即刻陸軍側に謝罪しなさい」

「な、何言ってるのよッ！ ドブネズミに頭を下げるなんて絶対に嫌ッ！」

名取の言葉に他の駆逐艦の艦魂達も反撃して来る。だが、最上はそんな皆をキツと睨む。その瞬間、一瞬にして部屋の中の空気が数度下がった。

「これは最後通牒です。謝りなさい。さもなければあなたを上官反逆罪として軍法会議にかけます」

最上の威圧的な言葉に、さすがの名取も渋々といった具合でうなずくと、仕方なくといった具合だが海軍側一同佐倉丸など陸軍艦魂達に謝罪した。それを見て、佐倉丸達は満足したような表情になるが、

「あなた達も海軍側に謝るであります。これ以上、陸軍の恥を晒さないでほしいであります」

今度は神州丸に睨まれ、さらには今村までもが「謝っておけ。今度の作戦は陸海軍の協力なしには遂行できない。ここで溝を作るな」とまで言われてしまい、渋々謝る。

こうして、艦魂による陸海軍同士の激突は一応終結したのだった。

「今回は助かったであります。ありがとうございます」

部屋から出た神州丸は駆け付けてくれた最上と三隈に丁寧に頭を下げて感謝した。そんな彼女に最上は小さく笑みを浮かべる。

「顔を上げて神州丸。困った時はいちれんたくしょう一蓮托生よ」

「そう言ってもらえると嬉しいであります。三隈殿もありがとうございます」

「ふえ？ 私何もしてないよ？」

「いいのであります。来てくれただけで、すごく嬉しいであります」

「そつか。えへへ、喜ばれちゃった」

「良かったわね」

喜ぶ三隈の頭を、最上が優しく撫でる。最上四姉妹の中でも、最上と三隈は特に仲がいいのはかなり有名だ。神州丸はそんな二人を見て羨ましそうに見詰める。彼女には姉妹という存在がないのだ。そんなどこかうらやましげな目で見詰める神州丸を、今村はそつと軍帽を取り上げるとそのクシャクシャなクセツ毛をワシャワシャと掻き乱す。

「な、何するでありますかッ！」

突然の事に顔を真っ赤にさせて怒る神州丸に、今村は悪びれた様子もなく笑う。

「いやあ、ちょうど掻き乱しやすそうな頭があったから、ついな」

「理不尽でありますッ！ 司令官はいじわるでありますッ！」

「そうさ。俺はいじわるだぞ」

おかしそうに笑う今村は再び神州丸の髪を掻き乱す。だが今回は神州丸も「や、やめるでありますッ！」と嫌がる声を上げるが、然程抵抗はしなかった。ただ、ほんのりを頬を赤らめて、困ったような、でもどこか嬉しそうな表情をしている事を、最上は気づき小さく微笑んだ。

「仲がよろしいですね」

「そうか？ まあ、娘みたいなもんだからな、こいつは」

今村の何気に言った《娘》という単語に、神州丸はひどく残念そうに落ち込んだ。そんな彼女を見て、最上は苦笑する。

「今村中将。もう少し女の子を見る力を磨いてくださいな」

「ははは、君みたいな美人に言われてしまえば全く面目がないな」

「そんな、私は美人ではありませんよ」

そう言いながらもちよつと照れる最上。そんな彼女に今村はいやいやと首を横に振る。

「容姿端麗、才色兼備。君はきっといい奥さんになれるな」

「ありがたいお言葉、ありがとうございます」

「いやいや、俺は本当の事をいったああああッ！」

突如今村は悲鳴を上げるとその場にうずくまってしまった。驚く最上と三隈の横で、ムスツとしたむくれているのは神州丸。

「司令官は陸軍の恥さらしでありますッ！」

「だ、だからつていきなり足を本気で踏む奴があるか……ッ！」

「当然の報いでありますッ！ フンッでありますッ！」

プイツとそつぽを向けると、神州丸はグツと今村の首根っこを掴む。そして、血走った目で最上を見詰め、

「いくらお友達とはいえ、負けないでありますッ！ 勝負でありますッ！」

そう言い残すと、悲鳴を上げる今村を引きずって暗闇の廊下の向こうへ消えて行った。残された最上と三隈はポカンとするばかり。

「お、お姉ちゃん……神州にケンカでも売ったの？」

「……あなたももう少し大人になったらわかるわよ、乙女心つても」

「ふーん、私にも彼氏とかできるのかなあ？」

何気なく言った三隈の言葉に、隣に立つ姉である最上がビクツと震える。そんな姉の反応に三隈はキョトンと首を傾げる。

「どしたのお姉ちゃん？」

「認めないわ」

「へ？ 何を？」

「彼氏なんて認めないわッ！」

突然そう怒鳴ると、最上は三隈の手をガシツと掴んだ。その迫力や握られた力に驚き、三隈はおろおろするばかり。

「お、お姉ちゃん……ッ！ 腕痛いよ……ッ！」

「来なさい三隈ッ！ あなたには女の生き方つても徹底的に叩き込んであげるわッ！」

「か、仮眠はッ！？ 私の大切な睡眠時間はッ！？」

「却下ッ！」

「そんな殺生なあああッ！」

最上は悲鳴を上げる三隈の首根っこを掴むと、神州丸とは反対方向に消えて行った。

この後、男と少女の悲鳴が艦隊中に響き渡ったのは、言うまでもない。

攻略部隊は二月二八日深夜、順調に目的地であるジャワ島沖に到着。今村中将は敵来襲に備えて護衛艦隊に夜間警戒を任せ、自らが率いる輸送船団をメラク湾、バンドム湾に突入。上陸用舟艇などを使って次々に部隊を上陸させていった。

闇夜の中、二つの湾は日本軍の精鋭陸軍部隊である第十六軍の兵や車両が揚陸され、埋め尽くされていく。今村はそれらの光景を『神州丸』の甲板の上で見守っていた。すでに彼も戦闘服に着替えており、上陸最終段階で彼も上陸する手はずになっていた。

「よおし、さすが俺の部下達だ。うまく上陸してるな」

「当然であります。名将今村將軍率いる第十六軍は天下無敵であります。上陸作業なんてお茶の子さいさいでありますよ」

「ははは、まあな。俺の部下達はそこら辺の友軍と違って、訓練訓練猛訓練した精鋭部隊だからな。上陸作業なんてお手のもんだ。まあ、本番はこれからだ。ジャワを攻略し、占領下に置く。その為には十万にも上るイギリスオランダ連合軍を撃破しなくてはならん。」

俺達の戦争はこれからだ」

「がんばってくださいであります」

「おうよ。はあ、船の上の生活は体がなまっていかんな。やっぱり俺は陸の上の方が似合うな」

「そ、そうでありますか……」

途端にしゅんと落ち込んでしまう神州丸。自分の乗り心地が悪かったと言われれば、どんな艦魂だって傷つくものだ。特に彼女は、今村の事を本当に慕っているの、そのショックは大きい。が、

「まあ、飯もうまかったし。いい旅をさせてもらったよ。ありがとうな、神州」

そう言つてにつこりと微笑む今村に、神州丸はボンツと顔を真っ赤にしてあわあわと慌てふためく。

「あ、ありがたいお言葉、ありがとうございますであります……ッ！」

「これでしばらくの別れだな。また何か俺の部隊が移動する時は、ぜひまたお前に乗りたいな。その時は、迎えに来てくれよ？」

そう言つて笑い掛ける今村に、神州丸は嬉しそうに大きくうなずくと、満面の笑みを浮かべて返事する。

「もちろんでありますッ！ 司令官の為なら、例え敵陣の中でも飛び込んで迎えに行くでありますッ！」

「ははは、頼もしいな」

神州丸と今村はしばし楽しそうに笑い合っていた。その間も確実に上陸作業は進み、今村自身が上陸するのも時間が迫っていた。

このままジャワ島上陸作戦は無事に終わると誰もが思っていた時、沖の洋上では不穏な動きが起きていた事を、まだ彼らは知らなかった。

その頃、沖を警戒している駆逐艦『吹雪^{ふぶき}』。その第一主砲の上ではこの『吹雪』の艦魂である吹雪が辺りを双眼鏡片手に見回していた。短めなポニーテールと細メガネが特徴的な吹雪は双眼鏡から目

を離すと小さくため息した。

「このまま何もなければいいのだけど……」

昨日、スラバヤ沖にて別働隊が敵艦隊と壮絶な海戦を行い、敵艦隊を撃破したという情報は入っている。だが、必ずしも安全という訳ではない。このジャワ島はオランダ軍の主力拠点でもある。その為、迎撃の為の艦隊を送って来ないという確証もない。例え少数でも、今上陸作業中の輸送船団は動く事ができない格好の獲物。何としても、守り抜かなければならない。

だが、自分だって陸軍は嫌いだ。中国で戦線を拡大し、日本を欧米から追い詰められる形にまで導いた陸軍を、許す事などできない。海軍があれだけ対米英戦に反対していたのに、陸軍が押し通した為に始まってしまった対米英戦争。日本を破滅に導いているのは陸軍。それは誰が見ても明らかだ。

だが、

「……今村中将、かあ」

昨日陸海軍の艦魂同士を仲裁した陸軍の司令官。彼は自分が思っていた悪名高い陸軍軍人のイメージから完全に違っていた。とても温厚で、優しい人。あんな人もいるのだなあと、吹雪は思った。……陸軍にも、いい人はいるのね」

よく考えれば当然の事なのに、陸軍＝悪というイメージから、吹雪はどうしても陸軍を良く思えなかった。確かにマレー攻略戦など、陸軍にも素晴らしい功績はある。だがどうしても、それらの功績も泥沼化してしまった中国戦線の悪評に霞んでしまう。

だから、目の前で見えた初めての陸軍軍人である今村に、どこか違和感を、そして自分達と同じ日本を守りたいという志を感じてしまい、吹雪は迷っていた。それは彼女だけでなく、あの場に居合わせた皆が思っている事。

陸軍は悪なのか、正義なのか。わからなくなってしまった……

「だから、見定める。今村中将がジャワをどう変えるかを」

その為にも、今は敵の侵入を許してはならないのだ。

吹雪は再び双眼鏡を覗き込んで辺りを警戒する。と、

「……何かしら」

吹雪は暗闇の向こうに何かを発見した。暗闇と言っても、今日は満月の為に意外と明るい。そんな闇夜に浮かんだ謎の影……

「まさか……ッ！」

吹雪が再び双眼鏡でその影を確認した刹那、艦内に警報が響き渡った。それは敵襲を知らせる警報だ。

吹雪は双眼鏡で確認せずとも確信した。今自分が見た水平線の向こうの影。それは

「敵艦隊来襲ッ！」

吹雪は双眼鏡を下すと、腰に下げた軍刀に手を掛けた。

この瞬間、後にバタビア沖海戦と呼ばれる戦いが始まった。

第一章 陸軍と海軍交われぬ想い（後書き）

という事で、今回はここまで。

ここまで読んだ方はこれがバタビア沖海戦という戦いだという事がわかりましたね。

これは戦史の中でも小さくしか扱われず、あまり有名ではない戦いです。しかし、だからこそロマンがあるのではないのでしょうか？

今回、黒鉄大和はこの作品にある想いを込めています。

それは 知られざる名将達の事。

最近多くなってきた艦魂小説を拝見すると、残念ながらメジャーな名将ばかりでこういう知られざる名将が少ないです。

この今村均陸軍大将（後に昇級）は、悪名高い帝国陸軍において最も偉大で尊敬され、連合軍からも認められた名将なのです。

僕は太平洋戦争において海軍では多くいますが、陸軍ではこの今村均大将（ジャワの名占領・ラバウルの要塞化）と栗林忠道大将（硫

くりはやただみち

黄島の英雄）の二名が好きです。陸軍はイメージが悪いのであまり好きではないのですが、この二人は日本史の教科書に載るべき英雄達なのです。

とまあそんな想いを込めて作った今作ですが、外伝オリジナルキャラも多々登場しました。

まずは陸軍揚陸艦艦魂、神州丸。陸軍の艦魂という事で軍曹口調（？）なキャラになっています。艦魂年代史を最初から知っている方なら、修正前の空母『大鳳（たいほう）』が原キャラになっているとわかるでしょう。

他にも海軍側は次からどんどん出て来ます。まあ、ほとんどが一発キャラですが。

あと今回は本編では妹を自分が殺してしまったと自分を責め続け、翔輝^{しょうき}に心を開いたサブヒロイン、最上也登場しています。そして、その妹の三隈も。

艦魂年代史外伝史上最もキャラ数が多い作品となる予定です。
現在も執筆中なので、もしかしたら更新が遅れるかもしれませんが、
気長に待っていてください。一応明日第二章、バタビア沖海戦編を
投稿する予定なので。
では皆さん、次回もまたお楽しみに！

第二章 月下の戦い 完全勝利の陰に（前書き）

今回は本作の章唯一の一万文字オーバーな話です。と言っても今回は海戦編ですので全て戦闘シーンとなっています。

思えば、新外伝シリーズでは初めての海戦。本編終了以来久しぶりの戦闘です。

モンハンのようなアクションバトルは慣れて来ましたが、艦魂戦闘はブランクがあるので少々見苦しい部分があるかと思いますが、どうか大目に見てください。

ではバタビア沖海戦、いよいよ開戦ですッ！

第二章 月下の戦い 完全勝利の陰に

駆逐艦『吹雪』から敵艦隊来襲の知らせを聞いた護衛艦隊司令官である原頭三郎少将はその後すぐに自ら座乗する軽巡『名取』、駆逐艦『初雪』、『白雪』でも敵艦隊を発見。さらにその数分後には駆逐艦『春風』も発見した。

こうして次々に敵艦隊を包囲していく護衛艦隊だが、このままでは輸送船団に被害が出ると判断し、沖合を警戒していた『最上』、『三隈』、駆逐艦『敷波』にも集結命令を出し、すぐさま隷下の第十一駆逐隊（駆逐艦『初雪』、『白雪』、『吹雪』）及び乗艦する『名取』に魚雷戦用意の命令を下した。この時まだ敵艦隊は日本艦隊の存在に気づいてはいなかった。

原少将は敵艦隊を外海に誘い出し、十分に輸送船団から引き離して殲滅しようと考えていた。しかし敵はこちらの動きなど知らず、ただ目的の輸送船団を目指して全力突撃しているので、あつという間に原少将の作戦は発動前に失敗に終わった。

そして、『ヒューストン』、『パース』はついに今村輸送船団を捕捉した。

ドオオンッ！ シュバアッ！

「な、何だッ！？」

突如として炸裂した音に今村が驚いて振り返ると、夜とは思えないほど辺りが明るくなっていた。一体何事かと上空を確認すると、そこにはまばゆい光を撒き散らす小さな太陽があった。

「あ、あれは……」

「司令官ッ！ 伏せるでありますッ！」

神州丸は悲鳴を上げながら今村を背後から押し倒した。刹那、『神州丸』の周りに爆音と共に数本の水柱が立ち上った。

ドオンッ！ ドンドンッ！ ドオオンッ！

次々に輸送船団の周りに水柱が立ち上がる。一瞬にして輸送船団は大混乱に陥り、敵襲の警報が鳴り響く。上陸用舟艇を出撃させている途中の輸送艦も作業を中断して慌てて動き出す始末。だがそこかしこに輸送艦がいる状況では満足に動けず、混乱に拍車がかかる。

一方、被弾はせずとも初弾で狙われた『神州丸』の甲板では間一髪今村を押し倒した神州丸が転倒した際に強く打った額を押さえながら険しい表情で起き上った。

「うう……、助かったでありますか」

神州丸は辺りを見回す。すると遠くの方の味方輸送艦の周りに次々に水柱が上がるのが見えた。仲間が傷つくのではないかという不安に、神州丸の背筋が凍りつく。と、そこで神州丸は思い出したように横に倒れている今村に駆け寄る。

「司令官ッ！ お怪我はないでありますかッ！？」

「あ、うう……、一体何がどうなってるんだ？」

「敵襲でありますッ！」

「て、敵襲だとッ！？」

今村は慌てて立ち上がると辺りを見回す。突然の奇襲攻撃に味方輸送船団は完全に混乱状態に陥っていた。統率なんてどこへやら。各艦が勝手に回避行動を行って身動きが取れなくなっている。

「クソッ！ ついて来い神州ッ！」

「は、はいでありますッ！」

いつもの柔和な表情は消え、今村は険しい表情で駆け出す。そんな自分が今まで見た事もないような切羽詰まった表情をする今村に神州丸は不安を抱きながらも彼の後に続いた。

今村輸送船団を襲撃した『ヒューストン』『パース』だったが、距離がまだ遠かったので結局命中弾はなかった。さらにここでもうやく後方に敵艦隊がいる事に気づいたが、すでに気づくのが遅過ぎた。

敵艦隊に最も接近しているのは追尾していた『吹雪』だ。距離にして二五〇〇m。すでに『吹雪』には司令部から魚雷発射用意の命令が下っている。甲板に装備された三基の六―cm三連装魚雷発射管、計九本の魚雷、さらに十二・七cm連装砲三基六門も向けられ、一斉砲雷撃が可能な態勢に入っている。

敵艦隊に左舷を向けて全武装が一気に使える態勢に入った『吹雪』の第一主砲の上で、吹雪は軍刀を構えて堂々と佇んでいた。

風に揺れる髪を押さえ、ズレたメガネを正す。その鋭い眼光が睨みつけるのは、無防備な輸送船団を攻撃した憎き敵が映っている。

「好き勝手暴れてッ！ 日本海軍必殺の酸素魚雷を喰らいなさいッ！」

吹雪はバツと腰を低くし、力強く横一線に軍刀を振るった。刹那、左舷から一斉に九本の魚雷が発射された。さらに遅れて主砲全門も一斉発射。爆音に靡く髪を押さえながらも、吹雪は決して敵から目を離す事はなかった。

吹雪必殺の主砲魚雷一斉発射だったが、敵艦隊は一斉に面舵を回してこれらの攻撃を回避してしまった。

「外したッ！？」

驚く吹雪だったが、すぐに敵の反撃が行われた。闇夜の向こうに突然光が迸ったかと思うと、次々に『吹雪』の周りに水柱が立ち上った。すさまじい集中砲火。水柱のカーテンに包まれ、吹雪は悲鳴を上げる。

「よ、よくもおッ！」

すぐさま『吹雪』も反撃するが、駆逐艦一隻対巡洋艦二隻ではこちらが劣勢だ。砲門数の数も劣るので、次々に炸裂する水柱のカーテン包まれて吹雪はさらに劣勢に陥ってしまう。

「こ、このままじゃ……ッ！」

吹雪は悔しい気持ちを堪えながらも、ここは一先ず撤退する事を決意。彼女が決心した刹那艦長達も状況不利を悟って撤退を決定し

た。

砲雷撃を止め、『吹雪』は機関部の缶室で燃料の重油を不完全燃焼させる。すると普段はほとんど煙の出ない煙突からすさまじい勢いで黒煙が噴き出した。これが艦艇が自らや友軍艦の姿を隠す為に使われる煙幕だ。

煙幕を張る事によって闇夜に溶けて姿を消す『吹雪』。敵艦隊はそんな『吹雪』の姿を見失ってしまい、攻撃を中止。『吹雪』は友軍艦隊に合流する為に敵艦隊から離れた。

一方その頃、敵艦隊を最後に発見した駆逐艦『春風』は味方輸送船団を守る為に命懸けの荒技を敢行しようとしていた。

今村の指揮によってだんだん統率を取り戻されつつある輸送船団を艦首付近に立って一瞥する長髪に柔らかな物腰をした優しげなお姉さんという雰囲気的女性、この駆逐艦『春風』の艦魂だ。

「例え陸軍さんでも、私達と同じ大和魂を持つ皇御軍。すめらみいぐさこのまま見捨てるなんてできませんわね」

そう言って春風は『吹雪』を取り逃がして再びこちらに向き直ろうとしている敵艦隊を見詰め、小さく微笑んだ。

「夜戦だったら私達日本海軍の方が一步も二歩も上手ですよ？あなた達の好きにはさせませんわッ！」

そう言って春風はバツと天に向けて軍刀を掲げた。刹那、『春風』は煙突から真っ黒な煙、煙幕を噴出。『春風』は煙幕を張りながら輸送船団の周りを右へ左へ動き回る。すると、まるで黒のカーテンのように煙幕が輸送船団を隠していく。これで敵艦隊から輸送船団は見えなくなった。

大量の煙幕を振りまきながら走り回る『春風』。その艦首では春風が小さくせき込んでいた。その真っ白な頬などには黒煙による煤すすがこびり付いている。

「まったく、せつかくの服やお肌が台無しですわ。この借りはきちり返してもらいますわよ。陸軍さん？」

そう言つて、春風は『神州丸』の横を通り過ぎながら甲板の上からこちらに手を振っている神州丸を見詰めて小さく微笑んだ。

「ありがとうございますッ！」

神州丸は自分達を守る為に危険を顧みずに煙幕を張ってくれた『春風』に向かつて満面の笑みを浮かべて手を振る。すると、艦首に立つ春風も小さく手を振り返してくれた。それを見て神州丸はさらに喜ぶ。

陸海軍の不仲。確かにそれはそうかもしれない。でも、こうして一緒に戦っている時は、同じ日本軍として共に戦える。神州丸は、それが嬉しかった。

現在今村は艦橋で必死に輸送船団の指揮を執って陣形を建て直している。徐々に統制を取り戻しつつある輸送船団を一瞥し、神州丸は自分達を守ってくれている煙幕を見詰め、不安そうな表情を浮かべた。

「……ご武運を、祈るであります」

そう言つて、神州丸は胸の前で手を組むと煙幕の向こうから鳴り響く砲声を聞きながら、海の仲間達の武運を祈った。

命懸けで『春風』が行った煙幕で輸送船団を隠すという荒技は見事に輸送船団の姿を隠し、『ヒューストン』と『パース』は輸送船団の追撃ができなくなった。敵輸送船団攻撃が失敗した二隻だったが、撤退するにもすでに周りは日本艦隊が取り囲んでいる状況。いつの間にか二隻は日本艦隊に取り囲まれてしまっていた。

原少将は第五、第十一駆逐隊に突撃命令を下した。

この時、第五駆逐隊のうち駆逐艦『旗風』はたかせは敵艦隊まで三五〇〇mという近距離にまで近づいていた。『旗風』は司令部の命令に従つてすぐさま攻撃を開始するが、先程の『吹雪』同様駆逐艦一隻隊巡洋艦二隻では勝負にもならず、『旗風』は猛反撃を受けて慌てて離脱。同戦隊を組む『朝風』あさかせ、『春風』と離れた位置で合流し、第五

戦隊全三隻の駆逐艦は再び敵艦隊に突撃を敢行した。

敵艦隊を包囲するように次々に各駆逐隊ごとに突撃を開始する各駆逐艦。まず敵に向かって突撃したのは第十一駆逐隊の『初雪』と『白雪』。

月明かりの下、恐れる事なく突撃して来る二隻に必死に迎撃しようと主砲を撃ちまくる『ヒューストン』と『パス』。二隻の放った砲弾は次々に突撃する『初雪』と『白雪』の周りに炸裂する。だが所属国が違う二隻は連携などでできずに単艦でのバラバラ射撃。夜戦最強と謳われる日本海軍相手に夜戦うの自殺行為でしかない。

恐れる事なく白波を立てながら闇夜を翔け抜ける『初雪』と『白雪』。単縦陣で突撃する二隻のうち、先頭で突つ走る妹艦『初雪』の艦首には二人の少女が背を合わせるようにして刀を構えて立っていた。二人はまるで双子のようにそっくりな顔をしている。右側に垂れたサイドテールの少女が初雪。左側に垂れたサイドテールの少女が白雪だ。

「初雪ッ！ 私の命、あなたに託したわよッ！」

「それは私のセリフだよ白雪ッ！」

二人は背合わせに互いに小さく笑い合つと、キツと敵艦を睨む。すでに距離は五〇〇〇を切った。敵の砲撃がより過激になるが、二隻は突つ走り続ける。そして、敵艦隊との距離が四〇〇〇を切った刹那、両艦は一斉に取舵を回して左折。敵艦隊に右舷を向ける。すでに六一c m三連装魚雷発射管三基、二隻合わせて十八射線の魚雷が敵艦隊を捉える。

白雪と初雪は天に神々しく煌めく月に向かって刀を掲げる。二本の刀はキンツと小さな音を立てて重なると、月の光を反射して煌めかせ、二人を神々しく照らす。その姿は、まるで月の女神のような美しさだ。

「純情可憐ッ！ 月下魚雷乱舞ッ！」

白雪と初雪は寸分狂わぬ動きで重なり合つたままの二本の刀を振り下ろした。その途端、一斉に十八本もの酸素魚雷が射出。十八本

の魚雷は敵艦目がけて突撃する。だが、敵艦はこれらをギリギリで回避してしまう。

「ああッ！ は、外れたよ白雪いッ！ ど、どうしようッ！？」

「落ち着きなさい初雪！ 一度離脱して魚雷を装填しましょうッ！ 装填終了次第もう一度攻撃よッ！」

「わ、わかったあッ！」

二人の言葉の通り、魚雷を外した事によって『初雪』と『白雪』はそのまま取舵を回し続け反転。敵艦隊からの砲撃をかわしながら退避した。

初雪と白雪は『白雪』の艦尾に移動すると、こちらに向かって滅茶苦茶に主砲を撃ち込んでくる二隻に向かって、思いのたけを込めて叫んだ。

「「覚えてろおーッ！」」

その声は『ヒューストン』と『パース』にも届き、両艦の艦魂は二人が再び自分達の前に現れる事はないと思った。

そしてそれは結局現実のものとなり、二隻はその後再び二隻と交戦する事はなかった……

続いて突撃したのは第五駆逐隊の『朝風』『旗風』『春風』の三隻。『春風』を先頭に『旗風』『朝風』で単縦陣を組みながら『初雪』と『白雪』の入れ代わりに突撃する。

先頭を翔ける『春風』の艦首では春風が小さくため息していた。「睡眠不足はお肌の大敵ですが、欧米人は礼儀というものがなくてませんわね」

苦笑しながらそう言う春風は前方に迫って来た敵艦隊を一瞥し、自分達のちっぽけな戦いを天高くから見下ろす月を見上げた。

「……今宵は、美しき月が私達を見守ってくれてますわね」

春風は小さく微笑むと、腰に下げた刀ではなく艦魂の力を使

つて空間から何かを取り出す。それは三八式小銃　この大戦において海軍のゼロ戦、陸軍の三八サンバチと謳われる日露戦争後からずっと日本を守り続けた三八式歩兵銃。海軍では陸戦隊で使用されており三八式小銃と呼ばれていたものだ。

春風は愛武器である三八式小銃を構えると、狙いを確実に敵艦に向ける。

夜風が春風の頬を撫で、長い髪をパタパタと揺らす。細められた瞳は照準越しに敵艦をしっかりと捉える。

「輸送船団には手出しさせませんわ。あなた達にはここで散つてもらいますわよッ！」

三隻は見事な単縦陣で敵艦隊に突撃。ギリギリまで近づくと『春風』を先頭に全艦一斉回頭。敵艦隊に右舷を向けるとすぐさま雷撃態勢に入る。が、敵艦だつてやられてばかりじゃない。必死の反撃とばかりに猛砲撃を行い、三隻はたちまち水柱のカーテンに包まれる。

「や、やりますわね……ッ！」

春風は何度も照準を合わせようとするが、敵艦二隻からの砲撃がそれを邪魔する。無数の水柱が自分の周りに次々に立ち上がり、春風の背筋が凍りつく。古参の彼女でも、平和だった時代に生まれた彼女には実戦経験はほとんどない。訓練とはまるで違う本物の戦いに、恐怖がこみ上げる。

「これが実戦……ッ！」

引き金に掛ける人差し指が震える。

訓練にはない《死》という恐怖。春風はフルフルと首を大きく左右に振るとその恐怖を必死に振り払おうとする。

「訓練通りにやればいいのですわ……私達にはそれができますわッ！　朝風姉様ッ！　旗風ッ！　行きますわよッ！」

三隻は攻撃範囲をできるだけ広くして命中率を高くする為に、三隻一斉に魚雷を発射できるタイミングを見計らう。だが敵艦隊だつて黙っている訳にはいかない。二隻は横向きに単縦陣で進む第五駆

逐隊に向かつて一斉砲撃を加える。三隻はたちまち水柱に包まれ、小さなその艦体はその波によって大きく荒れる。

予想以上の敵艦隊からの反撃に『春風』と『旗風』は魚雷を発射する事ができない。唯一『朝風』のみが魚雷を六本発射に成功するも、これらは全て外れてしまった。

攻撃が失敗した今、いつまでも敵艦と肉薄するのは危険。三隻はすぐさま離脱を図ろうとする。だが、敵艦隊だつてここで敵の兵力を少しでも減らしたいとばかりに逃げる三隻に集中砲火する。そのうちの一発が『春風』の右舷至近に炸裂。『春風』は至近弾を受けた。同時に春風の右肩が裂け、血が噴き出す。春風の表情に苦痛と焦りが生まれる。

「くう……ッ！ しつこいですわね……ッ！」

お返しとばかりに『春風』の後部に備えられている四番砲が火を噴くが、当たらない。

二隻から次々に放たれる砲弾の雨に、第五駆逐隊は苦戦。春風も生きて帰れないかもしれないと不安が過つた時、突如敵艦隊に数本に水柱が立ち上った。驚く春風が振り返ると、自分達を守るようにすさまじい砲撃を行う『名取』の姿が見えた。その勇ましい勇姿を見て、春風は小さく微笑んだ。

「さすが私達の司令官ですわ　今のうちに離脱しますわよッ！」

第五駆逐隊が無事に離脱して行くのを見て、名取はほっと胸を撫で下ろした。

名取は艦橋のすぐ後ろの前部マストの上に立っていた。夜風が吹き荒れ、彼女のサイドテールを乱暴に揺らす。

名取はメガネのブリッジを人差し指でクイツと上げると、凜とした瞳で今度は自分に向かつて砲撃を行っている敵艦を睨む。

「陣形が乱れた状態では、精密な動きを必要とする夜戦は戦えないわね　仕方ない。全艦北方に撤退ッ！　部隊の再編成を行うッ！」

まるで彼女の言葉の通りに、直後『名取』から隷下の全駆逐隊に

北方にて集結、再突撃するという命令が下った。

名取は自分を狙う敵艦隊をキツと睨むと腰の軍刀を抜き、無言のまま横一線に振るった。刹那、『名取』から四本の魚雷が発射された。

「……待って下さい。すぐにあなた達を沈めてみせるわ」

名取はそう言い残すと、マストからはるか下にある甲板に向かって飛び降りた。

発射された四本の魚雷はいずれも命中しなかったが、おかげで『名取』は無事に戦線を離脱。北方にて隷下の駆逐隊と合流に成功した。

北方に集結した部隊のうち、『名取』『吹雪』『初雪』『白雪』の四隻は魚雷の次発装填を急ぎ、また魚雷発射できなかった『春風』『旗風』は再攻撃の機会をうかがっていた。

一方その頃、水雷戦隊の攻撃を邪魔しないように攻撃を控えていた『最上』と『三隈』、そしてその直衛の駆逐艦『敷波』^{しきなみ}。しかし水雷戦隊が予想以上に苦戦をしている事を知り、ようやく攻撃命令が下った。

満月の空の下、敵艦隊に向かって突撃する『最上』『三隈』『敷波』。先頭を翔ける『最上』の第一主砲の上には最上と三隈が二人並んで立っていた。

「……名取達が苦戦してるらしいわね。私達は遠方からの支援砲撃を行うわよ。三隈、準備はいい？」

最上は振り返ると、先程から自分の手をギュッと掴んだまま黙り込んでいる三隈に声を掛ける。海風に揺れる白リボンは、最上と三隈の姉妹の絆だ。初めて会った時、このリボンをプレゼントしたら最初は怖がっていた三隈もたちまち笑顔になり、二人は姉妹の絆で結ばれた。三隈は、それからずっと最上と一緒に。リボンも、毎日欠かさずに結んでくれている。

最上にとって、三隈は大切な妹。彼女には他にも二人妹がいるが、

三隈が一番大切な妹であった。そんな彼女に戦闘をしるというのは、正直胸が裂けるように苦しい。姉だったら、自分に任せて逃げるとも言えるのに、姉である前に自分達は艦魂。戦う為に生れて来た悲しき海の戦姫。戦いに背を向ける事は、できないのだ。

せめて、この震える手で必死に自分の手を掴む大切な妹を死守する。それが、最上の姉としてのせめてもの決意であった。

「ごめんね三隈。本当は、あなたに戦いなんてさせたくない。でも私達は姉妹である前に同じ帝国海軍の軍人。戦ってこそ、自分達の居場所がある。戦わなくちゃ、自分達の居場所は守れないの。だから がんばろう」

三隈からの返事はなかった。無理もない。こんなまだまだ幼さを残す女の子にいきなり命を懸けて戦えと言った所で、できるはずがない。本当は自分だって戦いは怖いし、そんな大そうな決意もない。でも、姉としての決意。妹を絶対に守り抜いてみせるという決意だけは本物だ。

最上はうつむく三隈の頭の上に手を載せると、そっと撫でる。その表情は軍人としてではなく、姉としての優しさと、姉としての決意が入り混じっていた。

「安心して三隈。あなたは私が守ってみせるから。これが終わったら、鈴谷と熊野と合流して、一緒に日本に帰ろう。姉妹揃って、ね？」

そう言って小さく微笑むと、最上は再び前を見据える。その表情は先程までの姉のそれとは違う、帝国海軍軍人としての凛々しいもの。彼女も、れっきとした日本海軍軍人なのだ。

水平線の向こう、月明かりに照らされる敵艦を発見し、最上にも緊張が走る。表情は険しくなり、握る拳にはじんわりと汗がにじむ。震える足に叱咤しったをかけ、最上は毅然きげんと敵と対峙する。

「……お姉ちゃん、無理はしないで」

最上はそんないつになく真剣な妹の声を振り返る。その瞬間、三隈のクリツとした瞳が合った。いつの間にか不安を隠す為かギョッ

と自分の手を握っている姉の震える拳に、三隈はそつともう片方の手を添える。姉の手を、両手でしっかりと包み込む。

「三隈……」

「守られてるばかりは嫌。だから、私も戦うよ。戦って、お姉ちゃんを守ってみせるから」

そう言って三隈はパアツと天使のような優しげな満面の笑みを浮かべる。三隈に両手でしっかりと手を握られる最上は、その笑顔に小さく微笑む。

「ありがとうね……」

「お礼なんていらないよ。私、お姉ちゃん好きだもん」

そう言って笑顔を浮かべたまま三隈は最上に抱きついた。最上はそんな三隈の柔らかな髪を優しく撫でながら苦笑した。

何を一人で悩んでいたのか。

三隈は自分の妹である前に自分と同じ帝国海軍の軍艦だ。心配なこと、必要ないのだ。自分がすべき事、それは 信じる事。

信じて、共に全力で戦って、一緒に笑顔で勝利する。それだけでいいのだ。

大好きで、大切に守って来た妹 三隈。でも、いつの間にかその妹は立派に成長していたのだ。いずれ、自分の手を離れて独り立ちしてしまうかもしれない。それでも、後悔はしたくない。

立派な姉なら、妹の道を応援してやるものだ。

……自分はそんな立派な姉とは程遠い、過保護なまでに妹を守って来た。でも、それでも姉には変わりはない。だから、見守ってあげたい。

「でも彼氏は認めないわよ」

「ええッ!? な、何それッ!? どういう流れでそういう返答になるのおッ!?」

最上の飛び過ぎた言論にすっかり振り回されて慌てまくる三隈。最上はそんな妹に小さく微笑むと、そつとその頭を撫でる。

「三隈。私の背中、預けたからね」

「任してよ！　その代わり、私の背中もお姉ちゃんに任せたからね！」

「安心なさい。あなたの背中は死守してみせるわ」

「私だつて絶対守つてみせるもんツ！」

最上はその言葉に優しく微笑み、三隈もそんな姉の笑みに満面の笑顔で答える。そして、二人はそつと互いの手を握り合うと、再び迫り来る敵艦隊を睨む。距離にして一万五〇〇メートル。すでに敵艦隊は射程範囲内だ。しかしそれは同時に敵艦隊の射程範囲内に自分達が入つたという事も表している。

突如爆音と共に『三隈』の左方数十メートルに巨大な水柱が立ち上つた。それを合図に次々に敵艦隊からの砲撃が三隻を包み込む。悲鳴を上げる三隈を抱き締め、最上は敵を睨む。

「三隈に手出しはさせないツ！」

距離にして一万二〇〇メートル。『最上』は反撃とばかりに右舷から魚雷六本を発射した。刹那、続いて『三隈』からも六本の魚雷が敵艦隊目掛けて発射される。

「わ、私だつてやる時はやるんだからあツ！」

そう強がりと言う三隈に最上は小さく微笑むと、再び敵艦隊を睨む。さらに続いて距離一万一〇〇メートル、両艦の合わせて計十門の連装砲塔が敵艦隊を睨みつける。

「夜戦だつたら、私達日本海軍は最強なんだからツ！　いつくぞおーッ！」

三隈が気合を入れた刹那、両艦は一斉に探照灯を照射。月明かりに薄らと照らし出されていた二隻が一瞬にして光の槍に捉えられて丸見えとなる。

探照灯を使用するのは敵を捉えると同時に敵にも自艦を捉えられる事に繋がる。夜戦において最も重要視されるのは先手を打つ事だ。最終調整でクイックイツと各砲身が仰角を整える。

最上と三隈は探照灯に照らし出された二隻の敵艦を見詰め、互いにギュツと握り合う手に力を入れる。この手は絶対に離さない。そ

んな想いを込めて……

「撃てえええええッ！」

二人の声と共に『最上』と『三隈』、合わせて二〇門の砲身が一斉に火を噴いた。一瞬、暗い闇を昼のように輝かせる火が飛び出し、しかしそれはすぐに黒煙に変わって艦尾に流れて行く。撃ち出された砲弾は音速に近いような速度で上空へ空気の層を貫通しながら突き抜ける。

「行っけええええええええッ！」

十数秒後、探照灯に照らされる敵艦隊の周りに無数の水柱が立ち上った。次々に襲い掛かる砲弾の雨の中、二隻は必至の回避運動をする。だが、うち数発が『ヒューストン』に命中して火柱が迸った。闇夜の向こうに炸裂した火柱を見て、最上と三隈は手を合わせて歓喜の声を上げる。

「当たったよおッ！ 当たった当たったッ！」

「油断しないで三隈ッ！ まだ敵は生きてるわよッ！」

万歳して大喜びする三隈を叱咤し、最上は真剣な瞳を燃える敵艦を睨んだまま放さない。ここで油断をすれば、大怪我をする危険性がある。緊張を緩める訳にはいかないのだ。

最上の言葉通り、『ヒューストン』は生きていた。炎上しながらも僚艦『パース』と共に反撃を開始。『最上』と『三隈』は水柱のカーテンに包まれ、三隈は悲鳴を上げて最上の手をギュッと握る。

「きゃああああッ！」

「三隈に手を出すなあッ！ 喰らいなさいッ！」

三隈を背後に隠し、最上は殺意を身に纏いながら敵を睨み返す。刹那、再び二隻は一斉に発砲。砲口から噴き出す火炎が海の戦姫の横顔を一瞬照らす。

撃ち出された砲弾は次々に敵二隻を襲い、そのうち数発が再び『ヒューストン』に着弾して『ヒューストン』は爆発。さらに激しい炎を身に纏った。

しばし一方的な砲撃戦を展開していた『最上』と『三隈』だった

が、ここで思わぬアクシデントが起きた。

「三隈、大丈夫？」

「う、うん……」

敵の砲撃に集中しながらも最上は少し顔色の悪い三隈を心配する。実はこの時『三隈』は電気設備の故障によって探照灯を始めとする電気系統が麻痺。主砲発射も不可能となっていた。艦魂である三隈も軽いめまいや吐き気を感じている。

敵重巡を戦闘不能に陥れた影響か、敵からの砲撃は半減。最上は警戒しながらも視線は三隈に向けて彼女の背中を優しくさする。

「無理はしないで。後はお姉ちゃんに任せて」

「ご、ごめんねお姉ちゃん……」

「いいのよ。だって私はあなたのお姉ちゃんなんだから」

「うん……」

攻撃不能となった『三隈』は一旦戦線を離脱。残った『最上』は僚艦『敷波』と共に戦線維持の為に単艦で砲撃を行う。

「三隈は私が守るッ！ 死にたい奴は掛かって来なさいッ！」

最上は腰の軍刀を引き抜いて構えると、いまだに抵抗する敵艦隊に向けて突撃した。

一方、先程魚雷発射に失敗した『春風』と『旗風』は再び雷撃を行う為に『最上』に牽制されている敵艦隊に向けて再突撃した。

先頭を翔ける『春風』の艦首には海の戦姫、春風の姿があった。

右肩に巻かれた血がにじむ包帯は痛々しいが、彼女の瞳は死んではいなかった。むしろ、敵に反撃の一撃を入れる事に強い意気込みすらも感じる。

海風に靡く髪を押さえながら、春風は愛武器である三八式小銃を構える。見えて来たのは月明かりに照らされる薄暗い海の間際に見える炎。『最上』と『三隈』の砲撃によって炎上する重巡『ヒューストン』だ。

「最上や三隈ばかりにいい格好はさせませんわ。先輩として、私

達の力を見せつけてあげますわ」

最上や三隈よりも十年以上も先輩である春風はそう意気込むと、後ろに続く妹艦『旗風』を一瞥する。その艦首には明るい紺色のリボンでポニーテールに結んだ少女、旗風がこちらに向かって何かを叫んでいた。声は届かないが、春風は旗風の口の動きを見て小さく微笑んだ。

『ガ・ン・バ・ロ・ウ』

「……そうね」

春風は小さくうなずくと、再び前に向き直る。すでに彼我の距離は一万メートルを切っている。自分達とは反対側で砲撃する『最上』を一瞥し、春風は三八式小銃を構えると燃える敵重巡洋艦の横で照らし出されているもう一隻の敵軽巡洋艦に狙いを定める。

「これで終わりね。劣勢の部隊ながら正々堂々挑むその覚悟、敵ながら称賛に値しますわ。だから私達も、全力をもつてあなた方の覚悟に相応する覚悟で挑ませてもらいましょう。それが、同じ海の姫としての役目ですわ」

カチッ……

春風が引き金を引いたと同時に、『春風』から六本の魚雷が一斉に放たれた。着水して白波の中に消えた魚雷群。この暗い水面下を、六本の死槍が確実に敵艦に迫っている。春風は炎上する僚艦を守るように浮かぶ敵軽巡洋艦を見詰め続ける。

ドオオオオオオッ！

突如爆音と共に敵軽巡洋艦『パース』の側面に数本の水柱が立ち上った。途端に火の手が回って炎上する『パース』。春風はそれを見て小さく敬意ある敵艦に向けて敬礼した。

「……せめて、安らかに眠りなさい」

春風は敵艦に背を向けると、光に包まれて消えた。

その直後、僚艦『旗風』からも魚雷六本が発射。これらも『パース』に次々に命中し、『パース』はたちまち航行不能に陥った。

味方駆逐艦二隻から放たれた魚雷によって敵軽巡洋艦が航行不能に陥つたのを見て最上は小さく笑みを浮かべた。

「さすが春風ね。私も負けてられないわ。燃えるもう一隻の敵巡洋艦に止めを刺さない」と

最上は再び敵巡洋艦『ヒューストン』を捉える。炎上している為に狙うの安易だ。艦内中部に備え付けられている三連装魚雷発射管二基が回転し、計六本の魚雷が『ヒューストン』に向けられる。

第一主砲の上に立つ最上はこの大艦隊に挑んで来た勇氣ある敵艦を見詰める。その瞳に映っているのは燃える敵艦にいるであろう敵の艦魂の事。艦が炎上しているという事は、彼女も大怪我を負って、身を焼くような痛さや熱さに苦しんでいるだろう。

死よりも辛い激痛に耐えるしかない戦姫達。最上はそんな彼女達の事を想いながら軍刀を構える。

「……その苦しみ、今楽にしてあげる。せめて来世では、お茶の一杯でもごちそうしてあげたいわね、連合の英雄さん」

最上は一瞬だけ小さく微笑むと再び真剣な顔つきに戻り、気合と共に軍刀を容赦なく全力で振るった。同時に六本の魚雷が発射され、敵艦『ヒューストン』目がけて突き進んでいく。

最上は無言のまま滅びゆく敵艦隊に向けて敬意を込めて敬礼した。

だが、この『最上』から放たれた魚雷が、後に大いなる悲劇を生む事になってしまった……

しかし『最上』から放たれた魚雷は全本命中しなかった。この時最上があまりの恥ずかしさに真っ赤になった顔を押さえながら主砲の上にうずくまってしまったのは隠れた悲劇だろう。

一方、故障により一時戦線離脱をしていた『三隈』がここでもうやく修理を完了して戦線復帰した。

姉艦『最上』の前方に出た『三隈』の第一主砲の上には幼き戦姫三隈の姿があった。かわいらしいツインテールとそれを縛る姉から

もらった大切なリボンが風に揺れる。

「お姉ちゃんお待たせッ！ 私もがんばるよッ！」

三隈はピヨンとその場でジャンプして月に向かって小さな拳を突き出すと、空間から自らの武器である鎖鎌を具現化。しっかりと構えると先端に分銅のような重りが付いた柄の下から伸びる鎖をブンブンと振り回す。

「私だって、やればできるんだもんッ！ うりやああああッ！」

三隈は振り回す鎖を全力で敵艦に向けて投擲する。が、そもそも鎖鎌の鎖の長さは所詮は二メートル程度。届くはずもない。だが、艦魂の戦い方は普通ではないのはこの世界では常識だ。

鎖はあくまでも補助。主力はあくまで鎌の方だ。

鎖が投擲された刹那、照明弾が発射された。つまり補助だ。そして、主力である鎌を構える。それに連動し、『三隈』の主砲も一斉に動き出して敵艦に狙いを定める。炎上している上に照明弾に照らされた敵艦は距離にして九〇〇メートル離れている『三隈』からでもその悲惨な姿をさらけ出している。すでに無数の砲弾や魚雷を受けている『ヒューストン』は傾斜し、甲板や艦橋、主砲までもが見るも無残に破壊されている。しかし、それでも敵は諦めない。まだ生きている高角砲で必死に反撃して来るが、元々対空砲である高角砲の弾がそうそう当たるはずもなく『三隈』は一方向的な砲撃準備を整える。

「せいやあッ！」

三隈が鎌を振るった刹那、爆音と火炎と共に主砲が一斉発射。撃ち出された砲弾は容赦なく炎上する『ヒューストン』の周りに巨大な水柱を作り、同時に命中した砲弾が火柱を上げる。

各砲塔が連続して波状攻撃のように砲弾を撃ちまくる。次々に砲弾が命中する『ヒューストン』は速力がさらに低下。もはや浮いているのが奇跡のような状態であった。

「やったあッ！ 私だってやればできるんだよお姉ちゃんッ！ よおしッ！ 次はもう一隻の敵艦ッ！ 行つけええええッ！」

航行不能に陥った『ヒューストン』から『パース』に目標を変更し、三隈は再び鎌を振るって一斉砲撃を行う。たちまち『パース』は水柱のカーテンに包まれる。

日本艦隊による一方的な戦いはまだ終わらない。続けて第十二駆逐隊、駆逐艦『叢雲』^{むらぐも}、『白雲』^{しろぐも}が満身創痍の『パース』に向けて止めの一撃として魚雷を発射。『パース』は命中弾多数を受け、ついに力尽きて急速に大傾斜して横転、沈没した。

残るは炎上する重巡洋艦『ヒューストン』のみ。日本艦隊は勝利を確信していた。

だがすでにこの時、悲劇は起きていた……

第二章 月下の戦い 完全勝利の陰に（後書き）

という訳で、バタビア沖海戦前編終了です。

本海戦はまだ敵艦が残っているの、まだもう少し続きます。

今回は一発キャラばかりでしたが、多数の艦魂を登場させてみました。

久しぶりに大量の艦魂を書いてみましたが、どうでしたでしょうか？
さて、今回はバタビア沖海戦の悲劇編に突入します。

神州丸に迫る魔の手、その時今村は一体

今回は明日投稿予定ですので、お楽しみに。

第三章 神州丸被弾 輸送船団を襲う悲劇（前書き）

今回はサブタイトル通り神州丸が凶弾に倒れます。

護衛を海軍に任せ、陸軍の神州丸達輸送船団は上陸作戦を続行。しかしそこへ迫る死の恐怖。

突然の攻撃に輸送船団は大混乱。血にまみれて倒れる神州丸、そして今村は……

では、バタビア沖海戦悲劇編、スタートです！

第三章 神州丸被弾 輸送船団を襲う悲劇

護衛部隊の奮闘により敵艦隊を沖合に撃退し、ようやく安全となった今村艦隊は引き続き上陸作業を行った。

輸送船団を隠すように煙幕を張った『春風』を始めとした海軍の活躍によって、陸軍は次々に輸送船から上陸用舟艇を使って兵員や弾薬を揚陸。さらに揚陸艦などを使って戦車や輸送車などの車両部隊も揚陸。メラク湾、バンドム湾は日本軍によって占領された。

上陸作業を見守る『神州丸』もすでに揚陸作業を終え、格納庫内に大勢いた陸軍兵はすでに全員上陸を終えている。残るは、甲板の上で他の参謀たちと共に上陸準備を整えている今村達首脳陣だけだ。参謀などが作戦書片手に手順の最終確認を行っている横で、今村は神州丸と最後の別れをしていた。

「司令官の武運長久を、心より祈っているであります」

神州丸はそう言うとかつと踵かかとを揃えて見事な陸軍式の敬礼で答える。それを見て今村は「ありがとう」と小さく微笑むと、神州丸の肩を優しく叩いた。

「お前も元気だな」

「司令官こそ」

「まあ、陸軍船じゃ海軍に世話になる事も多いからな、佐倉のように海軍と対立する艦魂も多いだろうが、お前がいれば大丈夫だろう。気苦労も多いだろうが、がんばってくれ」

「ありがたのお言葉ありがとうございます。でも、佐倉丸もやり場のない怒りに苦しんでいるんです。私と違って、彼女は元々は皆の笑顔を運ぶ貨物船だったのであります。だからこそ、望まぬ戦いに苦しんでいるんです」

当時の戦争において民間船を軍が接収、輸送艦や特設軍艦に改造して実戦投入する事は常識であった。日本軍においては空母不足を補う為に最初から空母に改造できるような客船『かしわまる檀原丸』(後の空

母『隼鷹』^{じゆんよう}）が建造されていたほど。佐倉丸も元々は姉妹艦六隻を持つ日本郵船の貨物船だった。竣工後一年も経たないうちに彼女は陸軍に接收され、こうして兵員弾薬を運ぶ輸送船に変わったのだ。

「……佐倉丸も、昔は明るく活発な女の子だったらしく、髪形もポニーテールで纏め、男勝りの中にも女の子の一面があった、普通の女の子だったそうであります」

他にも元民間客船で現在は病院船として今作戦にも参加している『蓬萊丸』^{ほうらいまる}も、昔は白いワンピースと麦わら帽子、艶やかな長い黒髪が似合う、笑顔がかわいらしい純情可憐な少女だったらしいが、病院船に変わって多くの血や苦しむ姿、死んでいく人々、絶叫や悲鳴という悪夢に耐え続けた結果、今では長い髪はセミロングほどに短くされ、一切の感情を失って何の生氣も感じない人形のような変わり果てた少女になってしまった。

客船として、皆の笑顔を守って来た蓬萊丸にとって、病院船という地獄はあまりにも重過ぎた現実だったのだ。

このように民間出身で軍に接收された艦魂の多くは、佐倉丸のように荒れたり、蓬萊丸のように精神が破壊される場合が多々ある。軍船として最初から建造され竣工した神州丸にはわからない、彼女達だけの苦しみ。

「……私は、生まれる前から軍船になるのが決定していた艦魂であります。だから、部下とは言っても私と彼女達とでは大きな溝があるのであります。私は、彼女達から笑顔を奪い去った、軍そのものなのでありますから」

そう言って自嘲気味に笑う神州丸。同じ陸軍船でも、佐倉丸や蓬萊丸と神州丸は別の存在。海軍の『隼鷹』やその姉艦『飛鷹』^{ひよう}のように軍の艦魂と親しくなれる艦魂は稀。多くは決して消える事のない溝が存在する。

「私は、彼女達にとってのいい指揮官ではありません。ただの、彼女達の夢や希望を壊した、軍の手先なのであります」

海軍と違い、陸戦が主役の陸軍において『神州丸』のように陸軍

保有の純軍船という存在はほとんど存在しない。そもそも同じ国軍隊でありながら不仲である海軍との対立する日本陸軍だからこそ『神州丸』のような海軍を信じないで自分達の力でやる、みたいな船が建造されたのだ。他国では稀な話である。

自分のように元から軍隊に属していた艦魂は少ない。ほとんどが元民間艦魂ばかり。わかり合えても、実際はわかり合えていない存在ばかり。だから、海軍の最上と三隈のように仲がいい艦魂同士を見ていると、せつなくなる。

神州丸には姉妹はいない。仲間もほとんどいないし、親友と呼べるような存在なんていない。軍船の彼女にとつての幸せは、陸軍ではなく海軍にあったのかもしれない。

うつむき、今にも泣きそうな表情をする神州丸を見て今村は小さくため息すると、そんな彼女の軍帽を取り上げる。

「え？ か、返してほしいでありますッ！」

慌てて軍帽を奪還しようとする神州丸の頭を今村はそつと触れ、優しくその柔らかな髪を撫でた。そしてそのまま神州丸の手を取ると、そつとその手の甲にキスをした。そんな今村の突然の行為に神州丸は動きを止めると、今度は顔を真っ赤にして先程以上に大慌てで今村から離れた。

「な、何するでありますかッ！」

「うん？ 英国式のあいさつだが」

普通に返して来る今村に、神州丸は思わず転びそうになった。

今村は大正時代にイギリスに駐在武官として数年住んでいた事があつたのだ。おかげで日本と英米の国力の差を嫌というほど知った影響で、彼はこの戦争に反対していた数少ない陸軍将校であつた。

他にも現在首相である東条英機とうじょうひだめとは陸軍大学校での同期で、東条が十一位に対し今村は首席で卒業。まさに、エリート士官であつた。

ちなみに彼はクリスチャンで、聖書を愛読しているというの有名な話だ。神州丸も勧められたが、敵性国の宗教に関心を示すのはいかなものかと逆に今村を注意する始末。しかしその夜、こつそ

りと今村の寝室に侵入して聖書を借り神州丸はがんばって読んでみた。だが結局、理解できない内容ばかりですぐに諦めてしまったが。

「え、英国式のあいさつッ!? こんな不純行為がありますかッ!?」

「まあ、全部が全部って訳じゃないだろうが、昔から普通にある文化だな。路上で平気でキスするような国民性だし」

「け、汚らわしいでありますッ! 人前で接吻行為を行うなど言語道断でありますッ! これだから鬼畜米英は恥じらいを持たない最悪民族なのでありますッ!」

「おいおい、別にイギリス人にだっていい所はあるぞ? 俺もイギリスの友人はいるし」

「司令官は一体どの国の味方なのでありますかッ!？」

神州丸はついに頭を抱えてしまった。

なぜキスという行為を人前でできるのか、それが理解できなかった。日本の大和撫子はおしとやかで清楚というイメージで育ってきた神州丸には理解できないのだ。まあ、彼女が大和撫子に当てはまるかと言われれば、微妙なところだが。

「まあ、お子ちゃまな神州には近いできないだろうな」

「一生理解できないでありますッ! それに私はもうお子ちゃまなんかじゃないでありますッ! もう立派な大人な女でありますッ!」

「……不合格」

「今なぜ私の胸を見て合否を判定したのでありますかッ!? 不潔でありますッ! そ、それに私の胸はまだまだ成長するのでありますッ!」

「成長するかどうかは不明だが、そもそも成長段階って事は子供って事だろう?」

「はう……ッ!」

痛い所を突かれ、神州丸はついに言い負かされてしまった。こういう世間知らずな所もまた子供なのだろう。

今村は悔しそうに自分を睨む神州丸に苦笑し、軍帽を彼女に返すとそつとその頭を優しく撫でる。子供扱いされるのが嫌なくせに、こういう行為は嫌がらないのは彼女らしい。

「……このくらいじゃ、許さないであります」

「参ったなあ。どうすれば許してくれるんだ？」

「人の純情を奪っておいて、許してほしいと言う司令官の神経を疑うであります」

「純情ってお前……」

「手だろつが唇だろつがキスはキスであります。責任はちゃんと取つてほしいであります」

「参ったなこりゃ」

苦笑いして困ったように頬を掻く今村。だがその表情を見る限りあまり困ったようには見えず、神州丸はむくれる。

「と、とにかく許さないでありますッ！」

「おいおい、これから出撃だつてのに景気悪いなこりゃ」

「じ、自業自得でありますッ！」

神州丸は赤く染まった頬を膨らませてプイツとそつぽを向く。そんな自覚なしの子供っぽい行為に今村は苦笑する。

ここが戦場であるという事も忘れてしまうような平和な雰囲気。二人。だが、ついにその時が来てしまった。

「司令官。そろそろお時間です」

参謀の言葉に今村の表情から笑顔が消え、軍人としての顔に変わる。

「そうか」

ラッタルに向かって歩き出す参謀達を追って、今村も歩き出す。

正装ではない、カーキ色の戦闘服。それが陸軍軍人が戦地へ赴く時の格好である。そしてそれは、命の保証のない戦いへの旅立ちだ。

クイツ……

「神州……」

腕を引かれる感触に振り返ると、神州丸が今村の袖の先をちよこ

んと摘まんでいた。うつむいている彼女の表情は、彼には見る事ができない。

「司令官？」

「ああ、ちよつと先に行つてくれ。すぐに行くから」

「は、はあ」

怪訝そうな顔でこちらを見ている参謀達にそう言つと、今村は再び神州丸に向き直る。いまだに顔を上げようとしない神州丸だが、その肩が小刻みに震えている事を今村は気づいていた。

「栄光ある帝国軍人が泣くもんじゃないぞ」

「な、泣いてなんかないであります……ッ！」

「お前……、ほんとに素直じゃないな」

「ほ、ほつといてほしいでありますッ！」

「放つておけつたつて、お前が俺の袖を掴んでるんだろつが」

「うう……」

今村の鋭いツツコミに神州丸は悔しそうに今村を睨むが、返す言葉もないのか何も言わず、ただ睨むばかり。でも頬は赤いし今にも泣きそうな顔では全然威力はない。そんな状態なのに、神州丸は決して放そうとはしなかった。

「おい、一体どうしたんだ」

「死なないでほしいであります」

うつむく神州丸から放たれたのは、いつも元氣な彼女とは到底思えないような、小さく、どこか寂しげな声だった。

「神州？」

「……司令官には、生きていてほしいのであります。決して、死んではダメであります」

ギョツと、今村の袖を握る神州丸。うつむいていた顔を上げ、彼としっかりと視線を合わせる。その頬を、涙がボロボロと流れる。「例え作戦に成功しても、司令官が生きてなければ嬉しくも何ともないであります。司令官には、いつまでも生きていてほしいのであります。だから 絶対、死んじゃダメでありますよ」

必死に訴える神州丸。そのいつもは太陽のように輝いている彼女らしからぬ行為に今村はしばし驚いていたが、自分の無事を真剣に祈る彼女の姿を見てフツと小さく口元に笑みを浮かべると、そっと彼女を抱き締めた。今度驚くのは神州丸の方だ。

「し、司令官……ッ！」

「安心しろ神州。お前達の努力の為に、俺達は必ずジャワをイギリス・オランダ連合軍から解放してみせる。俺達は長きに渡って欧米という闇に支配されていたジャワを、日本という太陽で照らして解放する。必ず、この任務を成功させてみせるさ」

「わ、私が言っているのはそういう訳ではないでありますッ！ 私

はただ、司令官に――」
「もちろん、俺は死ぬ気はさらさらない。またお前に運ばれて戦地に行く時まで、必ず生きていてやるさ」

そう言って、今村は神州丸の頭を優しく撫でる。驚く神州丸が見たのは、自分に向かって優しく微笑む今村の姿。

「神州。お前も、死ぬんじゃないぞ」

今村の言葉に、神州丸は不敵な笑みを浮かべる。

「大丈夫であります。私だって帝国陸軍軍人であります。そう簡単に死ぬような失態はしないでありますよ」

「まあ、お前はそう簡単に死ぬような奴じゃないよな」

「……それは、ほめているのでありますか？ 尋常じゃなくバカにされているようにしか聞こえないのは気のせいでしょうか？」

「気のせいだよ　だが、気をつけるよな」

「そのお言葉、そっくりそのまま司令官に返すであります」

「ははは、こりゃ一本取られたな」

そう言って笑う今村を見て、神州丸も緊張を解いたように笑みを浮かべた。

きつと、彼なら大丈夫。そう思った……

本当は別れたくない。ずっとこのまま、二人一緒にいたい、そう願う神州丸。だが、時というのは残酷で、そんな彼女の夢き想いす

らも叶えてはくれなかった。

ついに、今村が『神州丸』から離れる時が来た。

「じゃあな、元気でな神州」

「はいであります。司令官こそ、お元気で」

今村と神州丸は固い握手をし合う。互いの瞳を見合い、その瞳の中の決意の炎を確認し合うと、どちらからとなく笑みがこぼれた。

歩み出す今村を、神州丸は手を大きく振って見送る　また会える事を信じて。

今村がラツタルの手すりに手を掛けた刹那、突如すさまじい爆音が辺りに響き渡った。

ドオオオオオオンッ！

「な、何だッ！？」

突如響いた爆音に今村は驚いて音のした方へ向く。すると、船団を護衛していた第二号掃海艇が急速に右に傾き、そのまま止まる事なく一瞬で轟沈してしまった。

「て、敵襲だッ！」

参謀の悲鳴を無視し、今村は水面から消えた掃海艇を悔しげに見つめる。あの掃海艇にも艦魂はいたはず、一瞬にして、その命が失われたのだ。

「くそおッ！　上陸は中止だッ！　全艦緊急回避ッ！」

「司令官ッ！」

そこへ慌てて駆け寄って来る神州丸。この海の下に敵の潜水艦がいる可能性が出てきたのだ。その表情が恐怖に満ちているのは当然だろう。

「し、司令官……ッ！」

「艦橋に戻るぞッ！　急げッ！」

今村と神州丸は急いで艦橋に向かって走る。

だが、輸送船団の悲劇はこれで終わらなかった。

ズドオオオオオオンッ！

再び響き渡った爆音に神州丸が振り返ると、少し離れた場所を航

行っていた輸送船が艦中部から真つ二つに折れて沈没していった。その輸送船には、見覚えがあった。

「さ、佐倉丸ッ！」

「何だとッ！？」

沈没したのはあの『佐倉丸』であつた。今村も沈んでいく『佐倉丸』を見詰め、悔しそくに唇を噛むと走る速度が遅くなっている神州丸の手を掴む。

「急げッ！ これ以上犠牲を増やすなッ！」

「は、はいッ！」

本当は今にも泣きたい。そんな彼女の気持ちが一ひしと今村にも伝わっていた。でも、自分は五万人にも及ぶ第十六軍の司令官。有事の際には心を鬼にしてでも部下達を守らなければならない。

今村は全力で甲板の上を走る。その間にも次々に爆音が響き渡り、味方船が被弾していく。船団は大混乱に陥つた。

艦魂達、特に何の防御装置もない裸同然の輸送船の艦魂達は悲鳴を上げながら逃げ場のない中でも必死に逃げ回っていた。それはまさに地獄のような光景だ。

そして、最後の悲劇が襲い掛かった。

ズドオオオオオオオオオオオッ！

「がああああああああッ！」

突如爆音と共に『神州丸』が激震。その瞬間、後ろを走っていた神州丸の体から血が噴き出し、彼女は悲鳴と共に倒れた。

今までに経験した事もないような激痛に、倒れ伏した神州丸は悶絶する。まるで身が焼かれるような耐えがたい熱を纏った激痛。神州丸はあまりの激痛に気が狂いそうになった。

「い、痛いでありますッ……ッ！ 痛い……ッ！ ひぎいッ！」

激痛の中、神州丸はそれでも必死に起き上がろうとしていた。手を血の海の上に突っ張って、必死に体を起こす。だが、すぐに力尽きて血の海に沈んでしまう。

でも、神州丸は決してあきらめなかった。

自分はこの輸送船団の旗艦。ここで指揮官である自分が倒れる訳にはいかないのだ。そんなちっぽけなプライドが、必死に彼女の体を奮い立たせる。

だが、プライドの空砲では敵を倒せない。本当に彼女を奮い立たせているの。それは

「し、司令官……ッ！ どこでありますかぁ……ッ！ ご、ご無事ひぐうッ！」

神州丸は激痛に耐えながら上半身だけ起こすと、辺りを見回して彼の姿を探した。だが、どこにも彼はいなかった。

「司令官……ッ？」

その時、神州丸は転落防止用の柵が壊れているのに気づいた。先程までは壊れていなかったはずの柵。そこまで思い至った瞬間、神州丸は悲鳴を上げる。

「し、司令官ッ！」

必死にほく前進のように体を引きずって柵に近づく神州丸。その跡を、血の帯がべつとりと付いてくる。

手に力が入らず、なかなか進まない。体は徐々に鉛のように重たくなっていく。視界もだんだんとぼやけて来た。でも、神州丸は諦めない。必死になって前へ進み続ける。

そして柵に到達し、神州丸は眼下を見下ろす。そこは何もないただの海が広がっていた。月明かりで幾らかは見えるが、それでも暗くて細かくは確認できない。

「司令官ッ！ 司令官ッ！ ゲホゴホオッ！」

咳と共に血の塊が吐き出され、神州丸はぐったりと倒れた。もう、体に力が入らない。起きるなんて、できなかった。

薄れ行く意識の中、視界の隅にあるものを見つけた。それはポツンと主人から置いて行かれてしまった軍帽であった。意識がもうろうとし、視界もぼやけているのに、なぜか神州丸にはその軍帽の持ち主がわかった気がした。

腕を伸ばし、その軍帽をしっかりと掴むと、大切にそれを両腕で

抱き締める。

大好きな匂いがし、ちよつとだけ心が落ち着く。

「……司令官……ご無事で……あります……よね……」

刹那、神州丸の瞳がゆつくりと閉じ、彼女は意識を失った……

突如として被雷した『神州丸』から少し離れた場所では、『神州丸』と同じように被雷して大損害を受ける船が傾斜しながらも浮かんでいた。煙突や船側面に描かれた赤十字マークが特徴の国際法で一切の攻撃が許されない病院船　『蓬萊丸』だ。

傾斜する『蓬萊丸』の甲板の上には、少女が一人血まみれで倒れていた。だが、その瞳はまるで死んだように何の感情も窺えない。激痛を感じているはずなのに、少女は悲鳴を上げる事も顔をしかめる事もせず、まるで人形のように横たわっているだけ。

「……死にたい」

微かに動いた口から放たれたのは、そんな悲しい言葉であった。彼女の名は蓬萊丸。この病院船『蓬萊丸』の艦魂だ　そして、戦争という悲劇に巻き込まれた犠牲者の一人であった。

かつては台湾航路を担当してお客と笑顔を運んでいた客船であった『蓬萊丸』。しかし戦争が避けられない状況に陥り、『蓬萊丸』は陸軍に接収。病院船に改造され、こうして実戦に投入されたのだ。客船の頃とは大きく変わり、笑顔を運ぶ事はなくなった。運ぶのは傷ついた兵士達ばかり。血まみれは当然。腕や足がない、内臓が飛び出しているというのも多々ある。悲鳴や怒号、絶叫などが響き、客船だった頃の面影はどこにもなかった。

蓬萊丸は、客船としてお客を楽しませる事に生きがいを感じていた艦魂だった。笑顔全開で、みんなを楽しませる事に毎日一生懸命。そんな、心やさしい子であった　しかし、病院船に変わり、天国から地獄に変わった事によって、彼女も変わってしまった。

地獄のような光景、耳を塞いでも聞こえる絶叫、嫌なのに感じてしまう血の匂い。何もかもが蓬萊丸の心を傷つけ、壊した。

結局、蓬莱丸は死んだ。肉体的ではなく、精神的に死んだのだ。それ以来、蓬莱丸は人形のように変わり果ててしまった。何の意思も感情もない、まさに人形のようになってしまった。

そして、早く死にたいとまで願っていた。

その願いが、ようやく叶うのだ。

「……やっと死ねる……もう、血を見なくて済む……」

そう言って、莱丸は何年ぶりか、小さな小さな笑みを浮かべた。思い出すのは楽しかった客船時代。客船に生れて、本当に良かったと心から思えた。

……もう、こんな地獄はごめんだった。

「……私を殺してくれて……ありがとう」

誰だかはわからないが、自分を地獄から救ってくれた者に感謝し、蓬莱丸はゆつくりと瞳を閉じた。そして、その瞳は彼女の願い通り二度と開く事はなかった。

突如輸送船団を襲った謎の魚雷。これによって今村輸送船団は第二掃海艇、輸送船『佐倉丸』、病院船『蓬莱丸』が沈没。輸送艦『神州丸』他数隻が大破座礁。輸送船『龍野丸』たつのまるも回避行動中に座礁してしまった。

この一連の被害によって約一〇〇名ほどの犠牲者が出てしまった。被害に対して犠牲者の数が少ないのは上陸作業を終えた船が多かった事が幸運であった。

しかし、第十六軍司令官である今村均中將もまた行方不明になってしまった。

第三章 神州丸被弾 輸送船団を襲う悲劇（後書き）

という事で、神州丸は大怪我を負って倒れ、今村は海に落ちて行方不明となってしまうました。

物語のメインキャラ二人が脱落……この先、大丈夫なんでしょうか？ 自分でも不安になって来ました。

あと、今回は輸送船などの特務艦の艦魂の悲劇も描いてみました。戦時に使用された輸送船は大半が元民間船。佐倉丸のような貨物船もいれば、蓬萊丸のように客船として生きていた艦魂もいるのです。しかしそれが戦争によって無理やり軍隊に徴兵され、軍船に改造されてしまう。彼女達にとっては、苦痛以外の何ものでもありません。客船として、皆の笑顔を運ぶ事に誇りを持っていたし、毎日が楽しくて、客船こそ天職だと信じていた蓬萊丸。

しかし軍に接收され、病院船に改造されてからはそれが一変してしまいました。

見るのは煌びやかなドレスを纏った貴婦人ではなく血にまみれた兵士達。

聞こえるのは演奏隊の美しいメロディーや笑い声ではなく兵士達の悲鳴や怒号。

全てが変わってしまった。

蓬萊丸が心に深い傷を負うのも、当然なのです。そしてそれは他の同じ事。

今回は太平洋戦争後期に起きた人間に対する徴兵ではなく、艦魂達の辛い徴兵について描いてみました。

ちなみに資料によって『蓬萊丸』は大破したとか沈没したとか意見が分かれるんです。その後の『蓬萊丸』の資料は残ってませんし。

なので今回は一応沈没という形にしました。

さて今回は大怪我を負った陸の戦姫神州丸と、最上達海の戦姫達の絆のお話です。

現在一応ストックはあるのですが、最後の方の物語の構築に苦戦しており、もしかしたら途中で毎日更新が途絶えてしまうかもしれません。その時はそういう理由があるので温かく見守っててください。
ではまた明日をお楽しみに〜ッ！

第四章 陸海軍を越えた絆（前書き）

さて今回はバタビア沖海戦の終結編です。

怪我を負った神州丸、行方不明になった今村。それぞれに小さな物語が起きます。

すみません、今回はかなり短いです。ですが内容的には結構あるの
で大丈夫だと思いますが……

では、短いですがどうか最後までよろしく願います。

第四章 陸海軍を越えた絆

一方、後方にて輸送船団が大混乱に陥っている事など知らない護衛部隊は残る敵重巡洋艦『ヒューストン』に攻撃を集中していた。

炎上する『ヒューストン』はすでに五〇発以上の砲弾と四本以上の魚雷を受けわずか十五ノットしか出ず、主砲は全て使用不能で高角砲のみがわずかに反撃している程度、浮いているのが不思議なくらいの損害を受けていた。

燃える『ヒューストン』を攻撃しているのは第七戦隊の重巡『最上』と『三隈』。遠距離からの一方的な砲撃が『ヒューストン』を追いつめたのだ。

敵艦からの反撃がなくなった事で、二隻についに撃ち方止めの命令が下った。この時にはすでに『ヒューストン』は機関が破壊されて航行不能に陥っていた。

航行不能に陥った『ヒューストン』に止めを刺す為、第七戦隊を護衛していた駆逐艦『敷波』に攻撃命令が下った。

命令を受けた直後『敷波』は直衛していた第七戦隊から分離。単艦にて炎上する『ヒューストン』に突撃した。

単艦にて敵艦に突撃する『敷波』。その艦首に立つのは長身に長い黒髪、整った顔立ちが時代が時代ならモデルをやっているもおかしくないほどの美少女。ただし、その口には小さな火を灯しながら煙を上げる煙草たばこがくわえられている。

「ふう、最上や三隈が追いつめた相手を私が止めを刺してもいいのだろうか？ あんまり気は進まないが、これも上からの命令なのよね」

敷波はため息と共に白い煙を吐いた。煙草をくわえたまま敷波は自分達日本艦隊と激戦の末に炎上した敵巡洋艦を見詰める。

「……悪く思わないでくれ。これも仕事なんだ。魚雷一番発射用意ッ！」

燃える『ヒューストン』に近づく『敷波』は魚雷発射管で狙いを定めると、一番魚雷の発射態勢に入る。敷波は短くなった煙草を海に投げ捨て、新しい煙草を口にくわえる。

腰の軍刀を引き抜くと、燃える敵艦に向かって無言のまま振るう。刹那、『敷波』から魚雷一本が発射された。続いて主砲が一斉に砲撃を開始し、『ヒューストン』に止めを刺す。

敷波は無言のままポケットからマッチ箱を取り出すと中からマッチを一本取り出し、着火。煙草に火をつけると一度マッチを振って消してから海に投げる。マッチ箱はポケットに。

一度大きく吸った後、フウツと煙を吐く。直後、爆音と共に『ヒューストン』に魚雷が命中。『ヒューストン』は急激に傾斜し始めた。

敷波は煙草をくわえたままめんどくさそうに頭を搔く。

「また厄介な仕事が増えたみたいね 敵兵を救助するわよ」

徐々に沈みゆく『ヒューストン』に『敷波』他数隻の日本駆逐艦が接近し、すでに総員退去が命じられて海飛び込む敵兵の救助を開始する。各駆逐艦は両舷からロープや縄梯子なわばしこを海に投げ込んで敵兵を救助していく。

まだ戦争に武士道や騎士道といった精神が残っている時代だからこその海軍の奇跡の一部であった。

五分後、『ヒューストン』はついに力尽きて横転。そのまま沈没した。同時に、一人の少女の命もまた、途絶えた瞬間であった。

沈みゆく敵艦に向かって敷波は敬礼すると、煙草をくわえたまま光に包まれて消えた。残されたのは彼女の煙草の白い煙だけだった

……

敵艦隊を全滅させ、意気揚々と輸送船団に戻る護衛部隊 だが、待っていたのは予想外の事態であった。

自分達が敵艦隊と交戦している間に、護衛対象である輸送船団のうち輸送船、掃海艇各一隻沈没。その他輸送船及び病院船三隻大破

という被害を受けていた　さらに、第十六軍司令官の今村均中將は未だ行方不明。

護衛部隊は海に投げ出された陸軍兵達の救助と今村中將の搜索に全力を注いだ。もちろん、警戒も怠ってはいない。

なぜ味方がこれほどの被害を受けたのか。護衛部隊の幹部達は原因究明を急いだ。

大破擱座した『神州丸』の一室のベッドには体中に包帯を巻いた神州丸が横になっていた。その横に立つのは最上と三隈、春風の三人だ。

「春風は怪我大丈夫？」

「ええ。至近弾で小破はしましたが、大した事はないですわ」

「あなたの奇策には驚かされましたよ。まさか煙幕で輸送船団全部を隠してしまうなんて。おかげで大した被害はなくて良かったです。あれは艦長の奇策ですね。私は何もしておりませんのよ。ちよつと煤がお肌やお洋服に付いてしまいましたけれど」

そう言つて小さく笑う春風に、最上と三隈にも自然と笑みが浮かぶ。だが、自分達の横で荒い息を漏らす神州丸を見ると、またも表情は曇る。

「輸送船団の周りに敵はいなかったはずだが……潜水艦でも潜んでいたのか？」

「あの辺はそんなに水深は深くはないわ。それは難しいんじゃないかしら？」

「でも、輸送船団は魚雷攻撃を受けて損害を受けたんでしょう？　私は潜水艦からの攻撃だと思うなあ。だって敵艦はこっちで引きつけてたんだもん」

三隈の言葉は確かであつた。あの戦いに敵兵力は完全にこちらに引きつけていたし、周囲に他の敵艦は確認できなかった。あるとすれば、やはり見つかる可能性が低い隠密性に優れた潜水艦くらいだろう。他に原因があるとしても、自分達には思いつかない。

「まあ、実際に被害は出ているからね。今はとりあえず部隊の再編成と原因究明を急ぎましよう。それが、死んでいった仲間や神州丸のように傷ついた仲間達に唯一できる子事ね」

最上の言葉に二人はうなずくと、そつと部屋を出て行こうとする、

「……司令官……どこで……ありますか……？」

そんな苦しそうな声に三人は一斉に振り返る。

「神州丸……」

荒い息とすごい寝汗を掻きながらうなされる神州丸。

「……私を……一人にしないでほしいであります……司令官……」
うなされながら必死に今村を呼ぶ神州丸を見て、最上は目を伏せた。

「……今村中将は、未だ発見されていないそうね」

「ええ。吹雪や白雪達が探していますわ。でもいくら明るいと言っても今は夜ですわ。敵地で照明弾や探照灯はそうそう使えませんし、発見は困難を予想されますわね」

「そうよね……」

この作戦は第十六軍を無事にジャワに上陸させる事。そしてそれを護衛・援護する事にある。すでに犠牲者が出ている上に、致命傷ともいえる司令官行方不明という状況。いくら大多数の上陸が成功しているとはいえ、成功とは程遠い。せめて、今村司令官だけでも発見しなくてはならない。

「私は艦橋に戻るわ。三隈はどうする？」

「私もお姉ちゃんと一緒に行く」

「私はここに残りますわ。誰かが神州丸の看護をしなくてはなりませんもの」

「お願いします」

神州丸は春風に任せ、最上と三隈は艦橋に戻る。残された春風は神州丸の眠るベッドの横の椅子に腰掛けると、タオルでうなされる神州丸の汗を拭き取る。

まだ自分よりもずっと幼い少女である神州丸。春風はそつとその震える手を握り締めると、小さく微笑む。

「大丈夫よ。きっと、あなたの大切な人は見つかりますわ。だから、今は安心して眠りなさい。陸のお姫さん」

陸軍と海軍。互いを罵り合い、戦争になっても同調する事はほとんどなく対立し続けた二軍。同じ日本人で、同じ日本軍で、同じ敵国を相手にしているのに、なぜここまで対立したのか。

もしも、陸海軍が合同して全力で戦争に臨んでいたら、多少なりとも何かが変わったかもしれない。

でも結局、陸海軍は対立し続けた。お互いの私利私欲の為に……けれど、全てがそうであった訳ではない。陸海軍で信頼し合った軍人同士も数多く存在しているし、すばらしい合同作戦も行われた事もある。全てが反発し合っていた訳ではない。

そしてそれは、艦魂でも同じ事。

海の戦姫春風と、陸の戦姫神州丸。

二つの白く細い手は、しっかりと結ばれていた。

海戦から三時間後、『敷波』は依然として行方不明となっている今村を搜索していた。

艦首でいつものように腰掛けながら煙草を吸う敷波。彼女の好きな銘柄は『敷島』という国内高級煙草の一つである煙草だ。

フウツと煙草の煙を吐き、敷波は満月を見上げる。

「美しい月ね……」

そう言つて敷波は輪っか状の煙を吹いてみる。吐き出された煙は見事にきれいな輪っかを描きながら天に昇っていく。それを見て敷波はクスリと笑った。

彼女も最上や三隈に言われて今村を捜していた。しかし、すでに彼が行方不明になつて三時間が経過している。それでもまだ発見されていないのだ。兵や艦魂達も諦め始めている者も少なくない。敷波も幾分か諦めていた。そもそも陸軍の指揮官がどうなるかと、海

軍の自分には関係ないと思っていた。

「まあ、ジャワは落としてもらわないと燃料不足で私達が動けなくなるから、それだけはがんばってほしいけど」

後はどうなるかと知ったこっちゃない。陸軍の占領後の原住民の扱いの悪さは有名だ。どうせ戦後非難されるとしても陸軍だけ。自分達海軍は日本軍の良かった方という手厚い扱いを受けるだろう。そんな事まで考えていた。

それから数分後、敷波は立ち上がると短くなった煙草を海に捨て、艦首に背を向けて歩き出す。夜戦が得意とは言っても、眠らない訳ではない。もう時刻は遅いし、寝るつもりでいた。と、

「海面に人影ッ！ 救助用意ッ！」

兵達がバラバラと飛び出して来る。突如として慌ただしくなってきた。どうやら遭難者が見つかったらしい。敷波はやれやれという感じで肩をすくめると、兵達が集まる場所に向かう。

十分後、救助に向かったボートが戻って来た。そこには毛布に包まっただず濡れの男がいた。その男を見てざわめく兵達。そして、敷波は小さくため息した。

「……まさか、私に救助されるなんてね」

また厄介事ができたため息する敷波。ポケットに手を伸ばすが、残念から煙草は切れていた。部屋に行かないとない。敷波はまたもため息すると、光に包まれて消えた。

そんな突如として光に包まれて消えた少女を見て、男は小さく苦笑した。

「おいおい、少しは歓迎してくれてもいいだろ？ 俺は別に海軍が嫌いって訳じゃねえってのによぉ」

そう言っただうしたもんかと首をひねるのは、行方不明となっていた第十六軍司令官、今村均中将その人であった。

「おう、そんな所で何してるんだ？」

その声に敷波は疲れたようにため息しながら振り返る。そこには

先程救助されたばかりの今村が立っていた。海軍の駆逐艦に陸軍士官の軍服などではなく、今彼は海軍士官の服を着ている。

「別にいいでしょ。陸軍さんには関係ないわ」

「おいおい、そんな冷たい態度はないんじゃないか？」

そう言つて今村は苦笑しながら敷波に近づく。敷波はそんな今村を煙たそうに見ると再びため息する。

「で？ 私に何の用よ？」

「海戦の結果は、どうなった？」

先程までの優しい笑みは消え、今村の顔が真剣なものに変わる。その表情の変化に敷波は一瞬驚くが、彼の問いに素直に答える。

「戦果は敵巡洋艦二隻撃沈。損害は輸送船『佐倉丸』、病院船『蓬萊丸』、第二号掃海艇沈没。その他輸送船数隻が大破または中破という状況よ」

「神州は？」

「『神州丸』は大破してるわ」

「そうじゃない。神州は無事なのかと訊いている」

敷波はああとうなずいた。彼が安否を訊いているのは輸送船『神州丸』ではなく、その艦魂の神州丸の事らしい。

「神州丸なら無事よ。血まみれで気絶している所を発見されて、今頃は手当てを受けて眠っているでしょうね。命に別状はないわ」

敷波の言葉に今村に小さな笑みが戻る。

「そうか。神州は無事だったか。良かったあ……」

心の底から喜んでいると感じられる、まるで子供の無事を知った父親のような反応だ。そんな彼の反応に敷波は小さく口元に笑みを浮かべると、再び彼に背を向ける。

「用はそれだけか？ だったら早く艦内に戻りなさい」

「まあいいじゃないか。お前はこんな所で何をやってるんだ？」

神州丸が無事だった事に幾分か余裕が生まれたのか、今村は自分に背を向ける敷波に声を掛ける。が、敷波は「別に」とだけ小さく返すのみ。今村は苦笑する。

どうしたもんかと困る今村など無視し、敷波はポケットから補充したばかりの煙草を取り出すと口にくわえ、マツチで着火する。

たっぷりとおいしい煙を吸った後、不要になった煙を一気に吹き出す。辺りに一瞬にして潮の匂いの他に煙草の匂いが漂う。

「へえ、お前煙草を吸うんだな。珍しいな」

「艦魂の中では極々少数派よ。普通は吸わないもの」

「でもいいよな。艦魂なら肺ガンとか肺炎になる心配はないだろ？」

「ふふふ、確かにそうね」

今村の冗談に、敷波は小さく笑い声を上げる。そんな彼女の反応に今村にも自然と笑みが浮かぶ。少しだけ、二人の距離が縮まったような気がした。

「一本いかがかしら？」

「うん？ ああ、じゃあ頂くよ　って、おいおいこれって敷島じやねえか。何でこんな高級品をお前が持つてるんだ？」

「秘密よ。詮索するつもりなら没収」

「わかったよ。あんまり興味ないしな。じゃあありがたく頂くぜ」

今村は敷波から一本煙草をもらうと、口にくわえる。すると、すぐに敷波が着火させたマツチを近づけてきた。今村は小さく礼を言うつと火に顔ごと煙草を近づけて着火。たっぷりと煙を吸った後、ゆっくりと吐き出す。

「うまいな。こんな極上物は滅多に吸えないな」

「私は毎日一箱くらいは吸うわよ？」

「……肺の病気にならない奴の特権だな」

「おかげでこの十二年健康に生きて来たわよ」

「なあんだ。十二年ってお前まだ子供なんだな」

今村が笑いながら言つと、敷波はムツとしたように彼を睨み、プイツとそっぽを向く。

「艦魂で十年以上生きていれば十分中堅組よ。そんな私が子供な訳ないじゃない。もう十分大人の女よ」

「いやいや、まだまだ幼さを残した子供だよお前も」

「うるさいわね。煙草没収するわよ」

「それは勘弁。戦いの後の一服は何よりも楽しいんだからな。それを奪われるなんて残酷以外の何ものでもないぜ」

「ふふふ、そうね。勝利の後の一服は、また格別なもの」

敷波は久しぶりに会った煙草仲間には内心ちよつとだけ嬉しかった。煙草を吸う艦魂なんて自分の周りにはほとんどいないから、こうして自分と同じように煙草を吸う者と一緒にいるだけで、どこか心が和む。

今村と敷波はしばし美しい月を見ながら、他愛ない話を肴に煙草を吸っていた。

第四章 陸海軍を越えた絆（後書き）

という訳で、今まで僕の艦魂にはいなかった煙草を吸う艦魂、敷波の登場です。

しかし困った事に僕は未成年なので煙草は吸ってませんので、煙草というものがわかりません。なのでかなり甘い描き方になっていますが、その辺はご勘弁を（笑）

春風もまた作者の予想に反していいキャラになりました。

残念ながら敷波と春風、いいキャラになりましたがこの後の外伝シリーズではもう登場しませんね（苦笑）

むしろ登場する可能性が高いのは吹雪ですね。でも結構普通なキャラに……

キャラ設定の選択を間違えました。

さて次回の話は今作の動乱編に突入します。陸海軍の艦魂達が、ついに全面激突ッ!?

……しかし、実はまだ執筆中。明日の投稿は難しいかもしれません。でも最低でも明後日には投稿したいと思いますので、気長に待ってください。

では次回をお楽しみにッ！

第五章 神州丸の想い 春風の願い（前書き）

今回は神州丸と今村の再会のお話です。

と言っても、感動とは程遠いコメディーな感じになっています。

神州丸の嫉妬、今村と敷波の漫才（？）、春風の天然、最上のため息。

様々な想いが交錯します。

さらに、コメディーな前半に対して後半は波乱となります。一体何が起きるのは読んでからのお楽しみ。

どうぞッ！

第五章 神州丸の想い 春風の願い

駆逐艦『敷波』に救助された今村はその後大破擱座した『神州丸』に戻った。参謀達と合流し、同艦に載せていた司令部設備の確認をする為だ。もちろん、傷ついた神州丸に会いに行く為でもあった。

その頃、神州丸は意識を取り戻していた。

ベッドの上に横たわる彼女は、全身に包帯が巻かれていてとても痛々しい。しかし、とりあえずひどい怪我ではあるが命に別状はなかったし、今もこうして普通に会話できるくらいには元気であった。

「……迷惑を掛けて、申し訳ないであります……」

「いいのよ、気にしないで。リンゴ食べる？」

「食べるであります……」

最上は小さく笑みを浮かべると、早速リンゴの皮をむき始める。見事に皮がひと繋がりむけていくのを見て、神州丸は感心する。

「すごいであります……」

「これくらい普通よ。私達は艦魂である前に、女の子なんだから……そうでありますね」

神州丸は小さく微笑む。すると、チラリと部屋のドアを見ると再びリンゴを見る。そしてまたドアをチラリと見てはリンゴに視線を戻す。その繰り返しだ。

そんな落ち着きがない神州丸に、最上は小さく笑い掛ける。

「少し落ち着いて神州丸。今村中将ならもうすぐ来られるわ」

最上の言葉に神州丸は「ふえッ!？」と奇妙な悲鳴を上げてボォンツと顔を真っ赤にさせる。そんな初々しい反応に、春風はクスクスと袖を口に当てながら小さく笑う。

「べ、別に私は司令官を待っている訳じゃないでありますッ!」

「あら? でしたらお呼びしなくてもよろしいのではなくて?」

「そ、それは……」

「今村中将もお忙しい方ですわ。なら私が出来なくてもいいと言つてきますわね」

「えええええッ!?　だ、ダメでありますッ!　司令官には絶対に来てもらつてありますッ!」

布団を吹っ飛ばすような勢いで飛び起きると、ドアノブに手を掛ける春風の手を押さえる。ニツコリと振り返る春風に、神州丸は懇願する。

「そ、それだけはご勘弁でありますッ!　司令官は呼んでほしいでありますッ!」

「あらあら、やっぱりお会いしたいのですわね?」

クスクスとイタズラっぽい笑みを浮かべる春風。そんな彼女の態度によりやく自分がからかわれていたと理解し、さらに顔を真っ赤にさせる神州丸。そんな二人を見て最上は小さくため息。

「……春風。あまり神州丸をからかわないでください。それと神州丸。あなたは怪我人なのだから安静にしていなさい」

神州丸は布団に戻ると深々と布団の中に潜ってしまった。そんな彼女を見て最上は再びため息し、クスクスと笑う春風を睨む。

「もう、神州丸は無駄にマジメなんですから、お戯たわむれは困ります」

「ふふふ、あらごめんなさい。かわいい子はいついついからかつちやいますの」

春風の反省の色が全くないような態度に最上はため息する。だが、心なしかその口元には小さな笑みが浮かんでいた。

こうしてふざけていられる事が、すごく幸せな事だと知っているからだ。

今は前のような平和な時代ではない。戦時中だ。いつ戦いが起きるかかわからないし、いつ死ぬかもわからない。だから、こんな何気ない幸せが、とても大切な幸せだなのだ。

「神州丸。リンゴ食べないの?　せっかくむいたのに」

最上の声に神州丸はモゾモゾと布団の中で数度動くと、ゆっくりと起き上がった。最上が切り終えたリンゴの盛られた皿を渡すと、

神州丸は素直に受け取る。すると、そのきれいに並べられたリングを見て神州丸の瞳がキラキラと輝く。

「うわあ、ウサギさんであります……ッ」

皿に並べられているのはウサギカットされたリング。嬉しそうに喜ぶ神州丸を見て、最上は小さく微笑む。

「あら、あなたにそんな特技があつたなんて驚きですわ」

「いえ、三隈がリングはウサギじゃないと駄々をこねるので練習したまです」

「ふふふ、仕事優先のできる女な最上も家庭的な所があるのですわね。見直しましたわ」

「失礼な。私だって仕事だけじゃなく女らしい事だってできます」

「ふふふ、ごめんなさいね。でもほんとに上手ね。才色兼備って、あなたのような子の為にあるのね」

笑みを浮かべたままほめる春風に、最上は頬を赤く染めて首を横に振って「そんな事ありませんよ」と謙遜する。

「それでしたら、春風は大和撫子と言った所ですね。平時での着物姿、お似合いましたよ」

「あら、嬉しいですわ」

今でこそ戦時になって色々と厳しくなってしまったが、平時の日本艦魂社会は結構平和だった。今は職務中も非番も軍服着用が義務化されているが、平時では非番の際は私服可だったのだ。春風の非番の時の着物姿は駆逐艦達の中では有名だ。

春風は小さく照れ笑いをした後、ふと窓の外を見詰める。暗闇のずっと向こうには、愛する祖国がある。自分達が命懸けで戦っているのも、そんな祖国を守る為だ。

「……また、みんなが着物が着れるような時は来るのかしら」

答えのない自問自答。何気なく言った春風の言葉に、最上は真剣な顔で答える。

「来ますよ。必ず、やって来ます。日本が平和になり、みんなで笑える時が。私達はその為に戦っているんですから」

迷いのない真っ直ぐな言葉。春風はそんなキラキラと真っ直ぐな最上を見て小さく微笑むと「そうね」とうなずいた。だが、春風はそれは無理だという事がわかっていた。

日本の真珠湾攻撃から始まった航空機による戦い。これは人間だけでなく艦魂も予想していなかった事態だった。だがしかし、その新たに登場してきた航空機は従来の海戦とは大きく異なる戦い方となり、そしてその戦いが重視されるようになってきた。

時代は、確実に航空機の時代に移り変わろうとしていた。

自分達駆逐艦は確かに航空機に対する対空砲を積んでいる。しかし十分ではない。元々自分達駆逐艦の役目は敵艦隊と肉薄して戦闘する海上決戦だ。その為に辛い訓練を行って技術を身につけ、最新の装備を身に纏い、夜戦及び水雷戦では他国を凌駕する実力を身につけるほど日本水雷戦隊は強くなった。

しかし、この戦いは航空機の時代に変貌しつつある。魚雷で敵機は落とせない。自分達駆逐艦は戦艦のような強力な装甲は持っていない。航空機の爆弾や魚雷一発が致命傷となるのだ。

……未知なる戦い。それがこの戦争であった。

そして、航空機のような消耗戦で日本が工業大国アメリカに勝てるはずがない。国力が違い過ぎる。技術力も、生産能力も根本から対抗できないほど強大な敵。

きつと、自分はこの戦争で命を落とす。そう確信していたし、覚悟していた。

でもせめて、この子達のような子供だけでも生き残ってほしい。そう心から願っていた。

「春風？ どうしたのですか？」

最上がぼーっとしている春風を心配して声を掛けると、春風は首を横に振って小さく笑みを浮かべる。

「何でもないですわ」

「そ、そうですか？ ご気分が優れないのでしたらもうお休みになられた方がよろしいですよ。あなたは怪我をされているのですから」

「そ、そうであります。あなたは私達輸送船団の恩人であります。今はゆつくりと休むべきであります」

二人の歳の離れた後輩に心配され、春風は小さく苦笑する。

春風は最上と神州丸よりも十年以上も長く生きているずっと年上の艦魂だ。そんな自分がこんな壊れていく祖国しか知らない子供達に心配されるなんて、ちよつと情けなかった。

「大丈夫ですわ。それよりも神州丸、早く食べないとせっかくのリングが水気を失っておいしくなくなってしまいますわ」

春風の忠告に神州丸は思い出したように慌ててリングウサギを一個手に取ると、少し食べるのを躊躇しながら口に入れる。途端に口の中に広がる柔らかな甘みと水気が神州丸に笑顔を灯す。

「おいしいであります」

「お礼なら春風に言つて。彼女がリングを持って来てくれたんだから」

「ありがとうございます、春風さん」

「お礼なんていいですわ。どうせ主計科から拝借して来たものですもの」

「……」

それは、まずいのではないか……？

急に食べる気が失せる神州丸。そんな彼女を見て最上は春風を怒る。

「春風、冗談はやめてください」

「そ、そうでありますよね。冗談でありますかあ……」

「ううん。冗談じゃないですわよ？」

「……」

「あら、どうしましたの？」

「より悪いですよッ！ 何て事をするんですかッ!？」

慌てて怒る最上だが、春風は「大丈夫ですわよ。どうせバレませんわ」と楽観的に返す。そんな春風の反応に最上は疲れたようにため息する。

「……わ、私も同罪でありますか？」

盗難品であるリンゴを食べてしまった神州丸はガクガクと震える。

「大丈夫よ。この場合は事故だもの、あなたに責任はないわ」

「そうですね。神州丸は安心して食べてほしいですわ」

「あなたが言えるような立場ではないでしょうッ!？」

「えっと……このリンゴはどうすればいいでありますか……?」

神州丸はおろおろとリンゴの乗った皿を差し出して来る。最上は深々とため息し、片手を額に当ててうつむく。

「今更返すなんてできないわ。食べちゃって」

「そうですね。それにおいしいって言ってたじゃありませんの」

「……素直に喜べないであります」

そんな感じで三人の艦魂達が話していると、ドアがノックされた。「誰ですの?」

「第十九駆逐隊所属、駆逐艦『敷波』艦魂です。今村中將をお連れしました」

それは今村を連れて来た敷波であった。

今村が来たという事に神州丸はパアツと笑顔が華やぎ、慌てて髪や服装を正す。最上はそんな神州丸の反応に小さく微笑むと、彼女の準備が終わってから二人を部屋に招き入れた。

「失礼します」

まず最初に部屋に入って来たのは敷波。さすがに上官の前という事もあって煙草は吸っていない。当然の事だが。

「わざわざありがとう敷波」

「いえ、最上司令の命令とあらばこれくらい」

「ありがとう。お礼にお茶の一杯でもごちそうするわ」

「い、いえ別に私は……」

「いいのよ。これは私からのお礼だから」

「いえ、私のような下っ端が司令と一緒にの部屋にいただけでもおこがましい事で」

「まあ、お前と一緒にだと煙草臭くて仕方ないだろうな」

最上にお茶を勧められてちよつぱり嬉しそうな敷波の後ろから水を差すような発言と共に現れた今村。そんな彼の無事な姿を見て、神州丸の顔がさらにパアツと華やぐ。が、

「私が煙草臭いとはどういう事よ」

「一日一箱も吸つてりや煙草臭くもなるだろうが」

「失礼ね。そんなに臭くないわよ」

「習慣つてのは怖いな。自覚つてものを奪つちまうんだからな」

「表出なさいこの陸助。あんたに海軍精神を叩き込んでやるわ」

「いや、俺陸軍だし」

すっかり今村に振り回される敷波。わずか短時間でここまで親しくなるとは、煙草の絆というのは恐ろしい。

そんな自分達の存在を忘れているんじゃないかというくらい盛り上がっている二人を春風はおかしそうにクスクスと笑いながら見守っている。

一方、最上はそろそろ止めるべきかと考えていると、

「……ッ!？」

突如背後からすさまじい殺気を感じてハツと振り返る。すると、先程まで春の日差しに照らされて柔らかく華やぐ花のような笑みを浮かべていた神州丸が、すさまじくどす黒い、迫力満点の殺気を身に纏つて今村を睨みつけていた。なぜだろう、その背後には冥界への扉らしきものが見える。

その尋常じゃない殺気にさすがの二人も気づいて口が閉じる。特に今村はなぜ自分にそんな殺気が向けられているかわからず困惑するばかり。

「お、おい神州。なぜ俺をどす黒い殺気を身に纏いながら血走った目で睨むのだ？」

最上は神州丸と今村をそれぞれ交互に見た後小さくため息する。春風も理由がわかつているらしく、先程からずっとクスクスと笑っている。ここで笑うのはちょっと不謹慎な気もするが……

「……司令官」

いつもよりも低い上に震えている声で今村を呼ぶ神州丸。さすがの今村も神州丸のあまりの迫力にふざけた態度も出ない。

「司令官は、私が怪我をして倒れている間、何をしていたでありますか？」

「な、何って……三時間ほど海を漂流していたが」

「……ずいぶん敷波さんと親しくなつたようでありますね」

「うん？ ああ、敷波とはちょっと煙草で親しくはなつたけど」

「司令官。煙草はお体に悪いから禁煙するよう何度も進言したはずでありますか？」

「あ……」

自分で墓穴を掘って自爆した今村。もはやその顔に余裕など一切ない。先程から嫌な汗が止まらず、できる事なら今すぐにでもここから抜け出したい。だが、そんな事当然できるはずもない。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

音にすればそんなようなダークオーラを身に纏いながら、神州丸はゆっくりとベッドから降りた。裸足のままペタペタと音を立てながら今村に近づく。今村の表情が引きつる。

「し、神州丸？ 君は一体何をそんなに怒っているのな？」

ピクツと神州丸の動きが止まった。そんな彼女の不自然な行動に今村は首を傾げる。

「……なぜ、私が怒っているか、わからないのでありますか？」

「え？ あ、うん。全然思い当たる事はないけど」

「……それで、ありますか」

フーとゆっくりため息を吐き、今村の手前で腰を落とす。そして、少しばかり乱れた彼の襟元を丁寧に正す。

「え？ あ、ありが」

「司令官の バカアアアアアアアアッ！」

ドゴオンッ！

すさまじい打撃音と共に今村の体が宙を舞った。そしてそのまま吹き飛ばされて壁に激突し、床に情けなく落っこちて倒れた。

あまりの激痛に悶絶する今村を一瞥して最上と敷波はため息し、春風はベッドに伏して必死に爆笑を堪えていた。

一方、今村に強力な鉄拳をぶち込んだ神州丸は

「ひぐう……えぐッ……うえええええええええんッ！」

すさまじい勢いで泣き出してしまった。ペタリとその場に崩れると、恥じらいもせずわんわんと泣いてしまふ。そんな突如態度が急変した神州丸に今村は激痛に耐えながら困惑する。

「な、何がどうなっているんだ？」

「知らないわよ。私に意見を求めないで。煙草が吸いたくてイライラしてるんだから」

「お前、完全にニコチン中毒だな」

「うるさいわね。別に艦魂は肺ガンで死なないんだからいいでしょ」

「まあ、そうかもしれないが」

「うえええええええええんッ！ 司令官のバカッ！ バカッ！

バカアアアアアアアアアッ！」

そんな全くもってすれ違つてばかりな二人を見て、最上は疲れたようにため息する。その横ではもはや笑い死にしそうな勢いで布団をバンバンと片手で叩きながら涙目で爆笑する春風。ほんと、不謹慎極まりない。

それから数分ほど神州丸と今村が言い合っていた時、突如として部屋のドアがノックもなしに勢い良く開いた。入って来たのは三隈。ここまで全速力で走って来たのか息が荒く肩が激しく上下している。「ちよつと三隈、ノックもなしに部屋に入るなんて失礼じゃない」

最上は礼儀知らずな妹を不機嫌そうに睨む。春風も笑いをやめて不思議そうにいつになく焦ったような表情をしている三隈を見る。今村と神州丸も言い争いをやめて敷波共々三隈を見詰める。

肩を荒くする三隈は姉である最上の姿を見つけると慌てた様子で彼女に駆け寄る。

「ど、どうしたのよ三隈。そんなに慌てて」

「お、お姉ちゃんッ！ 今すぐ逃げてッ！ 早くうッ！」

突如逃げると言い出す三隈。最上は一体何が何やらわからず困惑するばかり。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ。何で私が逃げる必要があるのよ」

「いいからッ！ 早く逃げてッ！ 陸軍がお姉ちゃんを」

「動くなッ！」

そこへ怒号と共に現れたのは武装した乙女達。ゾロゾロと部屋の中に入って来ると手に持つ機関銃や拳銃をその場にいる全員に向けて。一瞬にして、部屋は正体不明の武装集団に占拠された。その数は四七人にも上る。

「い、一体何のつもり？」

最上は驚きながらもこの場にいる最上級士官として努めて冷静に装う。機関銃を向けられても毅然としている最上に、武装集団の中から女性が一人出てきた。最上はその女性に見覚えがあった。確か、佐倉丸の参謀の一人だった艦魂だ。おそらくこの集団のリーダーだろう。

「帝国海軍第七戦隊、重巡洋艦『最上』も艦魂ですね？」

「そうよ。私に何か用なのかしら？ それと、これが人にものを頼む態度なの？ 即刻銃を下しなさい」

「残念ながら、私達陸軍は海軍とは違う組織です。あなたの命令は聞けません」

「……輸送船風情が生意気に」

敷波が悪態を突くと、突如彼女の背後にいた兵士が彼女の腹に拳を叩き込んだ。敷波は「かはぁッ……」と肺の中の空気を全て吐き出し、そのままその場に崩れ落ちた。

「敷波ッ！」

「最上。あなたを我々陸軍に対する反逆罪として拘束します」

「なッ！？ 何で私が」

「捕獲しろッ！」

彼女が命令を出すと、一斉に陸軍の艦魂達が動いた。海軍の艦魂にはできないような統制の取れた動き。すぐさま最上を束縛してし

まう。だが、最上だってそう簡単に屈服するつもりはない。目の前の腕に向かって容赦なく噛みつく。

「ギャアッ!？」

「この非国民がッ!」

「があッ!」

腹を蹴られ、最上はその場に倒れる。春風が動こうとするが、最上を人質に取られている状況では何もできない。ただ悔しげに唇を噛むだけ。

だが、最上は激痛に耐えながらさらに反抗する。目の前の艦魂の腹に頭突きをし、背後の艦魂にも蹴りを叩き込む。

最上の思わぬ反撃に陸軍艦魂は一度距離を取って彼女を包囲。最上はそれでも抵抗するつもりでいた。しかし

「大人しくしなさい最上。これを見ても抵抗できるの?」

敵隊長の手には、拳銃をこめかみに付きつけられて涙目になっている三隈が拘束されていた。それを見て、最上からサーッと血の気が引く。

「み、三隈を返してッ!」

「あなたが妹バカだという事は調査済み。この子には人質とさせてもらいます」

「三隈は関係ないでしょッ!」

「あなたが抵抗しなければ、この子に危害を加えるつもりはありません。あなたは黙ってついて来ればいいのです」

「くう……ッ」

三隈を人質に取られた最上は先程までの抵抗がうそのようにあっさりと捕まった。しかし瞳だけは殺気をみなぎらせて隊長を睨む。その目が気に食わないのか、隊長は舌を鳴らす。

「気絶させなさい」

刹那、最上の腹に強力な鉄拳が叩き込まれた。敷波と同じく最上も肺の空気を全て吐き出して気絶する。

目的であった最上の捕縛に成功した為か、集団は撤退する。だが、

「　ちよつと待て」

その声に隊長が振り返ると、その表情が少しばかり緊張した。彼女の前に立つのは第十六軍司令官である今村と、この輸送船団旗艦である神州丸。春風は気絶した敷波をベッドに寝かしていた。

「今村中将……司令官……」

陸軍艦魂達がどよめく。今村と神州丸は彼女達が見た事もないような憤怒の表情で自分達を睨みつけていた。だが、隊長は毅然とそんな二人に対峙する。

「何か用でしょうか？」

「なぜ、こんな乱暴な事をするでありますか？」

「最上と三隈を解放しろ。これは命令だ」

「　残念ながら、例え私達はあなた方に反逆者として扱われてもこればかりは止まれません」

先程までの凜とした声がうそのように、隊長は声を震わせて答える。恐怖の為ではない　彼女は泣いているのだ。

「これが最後の命令だ。武装解除及び人質を釈放しろ」

「できません。私達は艦魂赤穂浪士あこうろうしなのです。これは正当なる復讐なのです」

隊長の言った赤穂浪士とは、江戸時代に起きた亡き主君の仇打ちとして仇討を決起し、見事成功するもその後幕府に切腹を命じられて自害した四十七士の事。この事件の名は元禄赤穂事件げんろくあこうじけん、もしくは忠臣蔵ちゆうしんくらとして今も知られている有名な仇討事件だ。

「艦魂赤穂浪士？　それと最上の捕縛に何の繋がりがある」

今村の問いに、隊長はしばし無言でうつむきながら肩を震わせ続ける。見ると、他の四六人の艦魂達も肩を震わせたり泣き出す者まである。一体何がどうなっているのか。

しばしの沈黙の後、隊長はバツと顔をもたげると気絶する最上をキツと睨みつけ、怒号にも悲鳴にも似た声で言い放った。

「私達が最も信頼し尊敬していた佐倉丸様は　この最上に殺されたのですッ！」

第五章 神州丸の想い 春風の願い（後書き）

という訳で、今回は神州丸は災難でした。

今村と敷波、いつの間にあんなに仲良く（？）……

さらに天然春風の行動に最上はため息するばかり。彼女は真面目過ぎる故に苦勞人なのです。本編でも結構苦勞していたキャラでしたし。

そして話はいきなり急展開。

突如として襲撃して来た陸軍艦魂 艦魂赤穂浪士。

最上に味方殺しの疑惑が掛けられ、三隈が人質にされて彼女も掴まっ
つてしまいました。

復讐を誓う彼女達と、最上達の運命、そしてその時神州丸と今村は
ッ！？

次回ですが、現在全く執筆が進んでいない状況なんです。何せ艦魂
の再編が状況悪化によってすさまじく時間が掛かっていて、さらに
モンハンも遅れているので執筆しているので、執筆する暇が少ない
のです。言い訳になりますが、そういう現状なので。

現在次回更新は未定。なるべく急ぎますが、気長に待ってもらえた
ら幸いです。

では次回もまたお楽しみに。

第六章 最上の涙 残された者達の想い（前書き）

まずは謝罪をします。

二週間も更新が止まってしまつて本当に申し訳ありませんでした。執筆に苦戦した上にモンハンの方の執筆、さらに私情が重なつてしまいここまで遅れてしまいました。

やっと完成したので今まで待たされた分とまでは言いませんが、とりあえず読んでください。

ではどうぞッ！

第六章 最上の涙 残された者達の想い

輸送船『神州丸』の会議室、そこは重苦しい雰囲気包まれていた。

白いテーブルクロスが被せられた長テーブルを境に、海軍側の艦魂、陸軍側の艦魂が椅子に腰掛けて対峙している。しかし、以前のような両軍の睨み合いという雰囲気ではない。

静かなる怒りを燃やす陸軍側と、その怒りに何も言い返せない海軍側。場の雰囲気は完全に陸軍側に傾いていた。

静かなる闘志を燃やす亡き佐倉丸の仇を打とうとする佐倉丸の参謀だった艦魂。その彼女や他の陸軍艦魂に睨まれる最上はうつむいたままずつと沈黙を続けている。そんな彼女の周りには名取や春風、敷波や吹雪などの海軍艦魂の代表達が揃っている。しかし、誰も口を開こうとはせず、不気味な沈黙だけが辺りに漂う。

「お願い……」

沈黙の中、口火を開いたのは最上。顔を上げ、対峙する艦魂赤穂浪士隊長に最上は懇願する。

「三隈は解放して。私は逃げも隠れもないから」

必死に妹の無事を祈る最上。しかし隊長は表情一つ変えずに言い放つ。

「海軍の艦魂の言う事なんて聞けないわ。特に、あなたみたいな味方殺しにはね」

「……ッ！」

緊迫する室内。陸軍側の艦魂達が気が狂いそうな怒りに耐え、海軍側の艦魂がその怒りに胸が押し潰されそうになる。

そこへ、部屋のドアがノックなしに開かれた。一斉に皆の視線が集中する。

部屋に入ってきたのは今村であった。しかし、その表情はいつものような明るさはなく、暗く、真剣なものであった。

「ねえ、どうだったのよ」

ドア側にいた敷波は椅子から立ち上がると今村に詰め寄る。口調こそ冷静でいるが、ギョツと彼の服の裾を握るその手は小刻みに震えている。

今村はそんな敷波に対し何も答えず、一步步む。そして、自分達を見詰める陸海両軍の艦魂達を見回し、その重い口を開いた。

「……輸送船団が攻撃を受けた際、魚雷が発射された方向には敵艦は存在しなかった。しかし、当時『最上』がその延長線に存在し、魚雷が発射されている事が確認されている。そして、先程上陸地点から我が軍の魚雷の尾部が発見された」

刹那、最上がギョツと目をつむり、服の裾を強く握り締めた。そんな彼女を一瞥し、今村は結論を言い放つ。

「『佐倉丸』及び『蓬萊丸』、第二掃海艇を沈没させ、『神州丸』などその他数隻の輸送船を大破させたのは『最上』が放った魚雷だ」

その瞬間、陸軍側の艦魂達の殺気が膨れ上がる。皆一斉に武器に手を掛け、いつでも襲い掛かれる体勢に入る。それを見て海軍側は動揺し、今村に助けを求めるような視線を向ける。しかし、今村は止めなかった。

「それは、本当なの？」

震える声で問う敷波。うそだと言ってほしい、そんな気持ちが痛いほど伝わって来るが、今村は静かにうなづく。

「十中八九間違いない。海軍側の司令部も『最上』の誤射を認めている」

「そんな……ッ！」

愕然とし、その場に崩れる敷波。そんな彼女の肩を、春風がそつと叩いた。今村は先程から陸軍側で沈黙し続けている神州丸を一瞥し、今村は無言のままその場に立ち続ける。

隊長は今が好機とばかりに攻勢を開始。パンツと激しくテーブルを叩き立ち上がると、沈黙を続ける最上に怒鳴る。

「貴様は佐倉丸様を殺した殺人犯だッ！ いや、国家に対する反逆行為ッ！ 人間ならば死罪の極刑に値する大罪を犯したッ！」

続けて他の陸軍艦魂達も次々に罵声を言い放つ。しかし、最上も春風などの海軍艦魂達は何も言い返せない。

「佐倉丸様を生き返らせてよッ！ この船殺しッ！」

「蓬萊丸を返してッ！ 大事な仲間を返してよッ！」

「船殺し船殺し船殺しッ！」

「殺してやるッ！ 貴様を殺して佐倉丸様達の無念を晴らすッ！」

「二人を返してッ！」

「怪我した仲間達にも謝りなさいッ！」

次々に放たれる罵詈雑言。最上は何も言い返す事もできずにうつむき続ける。その肩が小刻みに震えている事は陸軍艦魂達は気づかない。気づいてもうそ泣きとか言ってまた非難するつもりだ。

「やめてくださいッ！」

そこへ最上を守るようにして吹雪が立ち塞がる。陸海軍の艦魂達とでは階級は全然違う。海軍側では駆逐艦は水兵クラス、しかし陸軍側の艦魂達は大型艦船が士官、中型が下士官、小型が水兵という扱いなので、吹雪が対峙するのはほとんどが士官や下士官クラスの艦魂達。当然水兵の分際である吹雪の乱入に陸軍側の怒りはさらに爆発する。

「水兵は黙ってなさいッ！」

「いいえできませんッ！ 確かに今回の事は私達海軍側の原因です。それにはもちろん謝罪はします。しかし、私達艦魂は自らの意思で主砲や魚雷、機銃さえも使えない無力な存在ですッ！ 魚雷を発射したのは『最上』の乗組員達ですッ！ 艦魂である最上に罪はないと思いますッ！」

確かにそうだ。艦魂が戦闘時にできる事といえば緊張を緩めず、艦内の士気を維持し続ける事ぐらい。自分の思い通りに魚雷を発射する事など、できるはずがないのだ。

しかし、頭ではわかっていても思いが走り続ける。確かに最上に

は罪はない。しかし『最上』には罪がある。そして、その『最上』の艦魂である最上も同罪。そういう方程式が成り立つのは当然の事。
「詭弁^{きへん}なんて聞きたくないッ！ 私達は亡き仲間達の復讐を果たすッ！ それだけよッ！」

「詭弁はそつちですッ！ 艦の失態を私達艦魂の責任にするなんて、それこそ詭弁そのものですッ！」

「き、貴様あッ！」

一人の陸軍艦魂が腰のホルスターから拳銃を抜き放ち構える。すぐさま吹雪も拳銃を構え、それはあつという間に全体に広がる。武器を構えていないのは最上、春風、神州丸、そして今村の四人だけ。
「そこまですわ。武器を向け合うなんて野蛮な事はやめて、話し合いしましょう。仲間同士で殺し合って、何の意味があるのですの？」

春風が間に入って両軍を仲裁する。だが、彼女は海軍艦魂。陸軍艦魂達はそんな春風の態度が気に入らず、一斉に罵声を浴びせる。

「結局は仲間の援護かッ！ クソ海軍の犬がッ！」

「仲間同士ッ！？ 私達は御国の為に必死になって戦ってるのよッ！ あんた達みたいなやる気もないダラダラと私達陸軍の足を引っ張るような軍隊、仲間でも何でもないッ！」

海軍全体に対して罵声を浴びせる陸軍艦魂。ついに、今まで耐えていた海軍側もさすがに堪忍袋の緒が切れた。

「足手まといはあなた達陸軍じゃないッ！ 中国で勝手に暴れ回って御国を危険に晒し、直接戦わないアメリカやイギリスを挑発ッ！そしていざ戦争になれば米英の相手は全部海軍任せッ！ あなた達こそ国辱犯よッ！」

名取が言い返すと、陸軍側が一斉に殺気を纏いながら逆襲して来る。

反撃するのは名取だけではない。その隷下の朝風や旗風などの駆逐艦達も言い返す。その時、突如銃声が轟いた。驚く一同の中、突如最上が椅子から崩れ落ちた。

「も、最上ッ！」

悲鳴のような声を上げながら駆け寄る春風。倒れる最上を抱き起こすと、彼女はぐったりとしていた。そして気づく。彼女の軍服の二の腕部分に穴が開いている事に。それは、艦が沈まない限り怪我はしない。しかし傷はつかないが痛みだけは変わらないという艦魂の特徴が生み出す傷跡。銃痕であった。

突然の銃声と最上が撃たれて倒れたという状況に、動揺する陸軍艦魂達。だが、そこへ海軍艦魂達の怒りが爆発する。

「ひどいッ！ 発砲するなんて信じられないッ！」

「貴様らの方が国家に対する反逆罪だッ！」

「誰よッ！ 誰が撃つたのよッ！？」

喚き散らす海軍艦魂達。しかし陸軍艦魂達は《知らない》、《私達は何もしていない》と白を切る。その反省の色もまるでない態度に、海軍艦魂達は一斉に武器を構えて怒りを爆発させる。その時、

「や……やめて……」

力なく小さな声で最上がつぶやいた。その声に辺りに再び沈黙が流れる。

春風の腕の中、最上は苦痛に耐えるような表情を浮かべながらゆっくりと起き上がると、自分を見詰める皆を見回す。

「……誰も撃つてない……撃つたのは……私自身だから……」

最上の爆弾発言に部屋に衝撃が走る。陸海軍の艦魂関係なく、皆が驚きのあまり言葉を失って彼女を凝視する。そんな視線を受けながら、最上は傷口を押さえてうつむく。

「大丈夫？」

春風の問いにすら、最上は何も答えない。ただ、春風の腕からゆっくりと離れると、そのまま驚愕のあまり立ち尽くす陸軍艦魂達の前で。土下座する。

「も、最上？」

「ごめんなさい……私のせい……私のせいで佐倉丸が……本当に、申し訳ない」

土下座して謝る最上。彼女の突然の行為に春風などの海軍側は呆然とするばかり。だが、陸軍側は我に返ると、すぐさま最上に集中砲火を与える。

「謝って済む問題じゃないでしょッ!？」

「あんたが佐倉丸様を殺したんじゃないッ!」

「^{ひと}船殺しッ!」

悲鳴のような罵声に耐えながら、最上はただ頭を下げ続ける。そんな彼女を見下したような目で見詰める隊長。

「土下座程度じゃ許さないわよ。あんたは、私達の大切な仲間を殺した。この事実是不変ならないわ。許される問題じゃないわよ」

「わかつてる……」

「何がわかつてるって言うの？ 自分で自分の体を拳銃で撃ち抜くような精神破綻者に一体何がわかるって言うのよ」

「……少しでも、亡くなった佐倉丸や傷ついた輸送船の痛みを自らにも刻みただけよ」

「偽善主義？ そんなもので、誰が納得するとも？ 死んでいった連中が、それで成仏できるって言うの？」

「きつと、できないわ。これは……私の身勝手なけじめ」

「自分のいい加減なけじめを、勝手に偽善で私達や佐倉丸様達に押し付けないでッ! あんたの罪は決して消えないッ! あんたは仲間を殺したッ! それは動きようのない事実よッ!」

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい」

頭を下げ続ける最上。その方は小刻みに震え、嗚咽が漏れ、声は震えている。涙を流しながら必死に謝り続けるが、それで死んだ者達が生き返って来る事はないのは当然。陸軍側はむしろ謝罪の言葉だけという最上の態度に怒り狂う。

「私達の怒りはこんなものじゃないわッ!」

「そうよッ! あんたも死になさいッ! 命で罪を償いなさいッ!」

悲鳴のような声で怒鳴る陸軍艦魂達。だが、それはできない。艦魂は艦が沈まない限りは死なない。つまり、艦魂である最上が死ぬ

には、この重巡洋艦『最上』が沈むしかない。だがそれは道理的にも戦略的にも間違った事でしかない。

陸軍艦魂達もわかつている。この戦いで、数少ない重巡洋艦である『最上』を失うのは大幅な戦力損失に繋がる。本当なら爆薬を仕掛けて本気で爆沈しようと思うくらいに最上を恨んでいる。だが、海軍艦魂以上に陸軍艦魂達は愛国心がずっと高い。祖国の危機に繋がるような事は、決してできない。

辛い現実には苦しむ陸軍艦魂達。そんな彼女達に最上は頭を下げ続ける。

「本当にごめんなさい……ッ！ 私ならどうなってもいい。半殺しにしても構わない。でも、沈没だけはやめて……ッ！ 私には、大勢の乗組員と御国の未来があるのだからッ！」

「戦闘艦の優遇って奴？ ふざけないでッ！ あたし達後方支援の艦にだって生きる権利はあるッ！ それを奪っておいて、自分だけのうのと生きるなんて許されないわよッ！」

怒り狂う陸軍艦魂達。だが、気持ちの上では最上に死んでほしい。殺したいと思っただけでも、実際にはできない。これは、自分達艦魂だけの問題ではないのだ。そこに乗る人間や、守るべき祖国の命運にも繋がってしまう。

隊長は土下座を続ける最上を睨んだまま、微動だもせずに立ち続ける。

「隊長ッ！ こいつは生きている事を後悔させるくらいに殴りましようッ！」

「命乞いをして、殺さない程度に粛清をッ！」

「っていうかも蹴らせるッ！」

暴力的な意見を吐く陸軍艦魂達はまだマシな方かもしれない。だが、四七人もいるの中にはもっと非道な意見も出て来る。

「艦魂の見える男達の慰安兵にでもなってもらうのはどう？」

「いいわね。艦魂は妊娠しないんだし、男達もきつと喜ぶわよ。こいつそれなりの顔立ちしてるし」

「女に飢えてる連中が多いからね。きつとボロボロになるまで犯されるわね」

性的な暴力に訴える冷徹な連中もいる。最上は殴られる事は覚悟していたようだが、それは予想外だったらしく動揺する。

「そ、そんな事まで……」

「残念だけど、私達艦魂は女なのよね。だから、女に生まれて来た事を後悔させてあげる」

「ふふふ、姉さんそれは間違いよ。女だから死なずに済むし快樂も得られるんだから、女に生れて来た事に感謝しなきゃ」

不気味に笑う陸軍艦魂達に、最上の顔から血の気が引く。だが、決して拒否の言葉は言わなかった。それで自分の罪が少しでも償えるのであれば、それでも良かった。

これから起きる罰に恐怖し、涙を必死に堪える最上。そんな彼女を見て冷徹な笑みを浮かべる陸軍艦魂達。そんな中、隊長はじつと最上を睨み続けるばかり。

「そんな事、絶対に許しませんわッ！」

突如として響いた怒号。その声に振り返り、一同は驚く。そこにいたのはいつも優しい笑みを浮かべている彼女とは別人のように怒りに顔を歪ませる春風。憤怒に満ちた彼女の背後からは殺気にも似たすさまじく闇に近い気配が放たれている。

驚く陸軍艦魂達に向かって、春風は怒りの声を上げる。

「さつきから黙って聞いてれば調子に乗り過ぎですわ。私にだって堪忍袋というものがありますわ。最上に謝りなさい。今すぐに」

突如話の中に入って来た部外者である春風の容赦のない命令に、陸軍艦魂達は一斉に反撃を開始する。

「あんたには関係ないでしょッ！ 黙ってなさい水兵ッ！」

「駆逐艦程度の分際で生意気よッ！」

「その駆逐艦に護衛してもらわないと洋上の的でしかないあなたの方が生意気ですわ」

「何ですってッ！」

今にも飛びかかって来そうな勢いの陸軍艦魂達に真正面から対峙する春風。スツと瞳を細く絞らせると、背中に背負っていた三八式小銃を構える。

「いくら温厚な私でも、今回ばかりは容赦しませんわ　武器を構えなさいッ！　全面戦争よッ！」

春風の掛け声に、残る海軍艦魂達は一斉に武器を構える。それを見て隊長は無表情のまま「戦闘用意」と淡々と命令を発する。すぐさま陸軍側艦魂達も武器を構え、部屋は再び一触即発の戦場を化す。「やめてッ！　武器を捨てなさいッ！」

すぐさま最上が武装解除命令を出す、春風達はその命令を無視する。

「春風ッ！」

「黙ってて最上。もうこれはあなただけの問題じゃないですわ。これは、海軍全体の問題。先程までの野蛮としか言いようのない愚行や言動、もう我慢の限界ですわ」

「春風……」

キツと陸軍艦魂達を睨む春風。その視線を真っ向から受けるように睨みかえしながら軍刀を構えた隊長。

不気味な沈黙、そしてそれは突如として破られた。

「撃ち方　」

「やめるでありますッ！」

双方の指揮官同士の攻撃命令が下る寸前、今までずっと沈黙し続けていた神州丸の怒号が響き渡ってそれを制した。

突然の怒号に、両軍共に動きを止めて神州丸を見る。神州丸は涙目でキツと陸軍艦魂達を睨む。その鋭い眼光に陸軍艦魂達は一瞬にして委縮してしまう。

神州丸は無言で隊長に近づくと驚く彼女の頬を鋭くビンタした。その威力はすさまじく、隊長は悲鳴も上げられずに吹き飛ばされて倒れた。

驚く艦魂達を無視し、神州丸は床に泣き崩れる最上に近寄ると、

そつとその肩を叩いた。

「最上、大丈夫でありますか？」

「神州丸……」

最上が顔を上げると、そこには優しく微笑む神州丸がいた。

「申し訳ないであります、私の部下達があなたを傷つけるような事を言つて……」

「謝るのは、私よ。あなたの部下を殺して、あなたを傷つけたのは私。本当に、ごめんなさい……ッ」

泣き崩れる最上。春風達はそんな彼女に近づこうとするが、彼女の命令を無視したという後ろめたさから近づけずにいた。

神州丸は、そつと最上を抱き締める。

「……最上は悪くないであります。人間のミスを艦魂に押し付けるのは横暴であります。それに 私は感謝しているであります」

神州丸の言葉にその場にいた者皆に動揺が走る。特に過剰反応したのは彼女の隷下である陸軍艦魂達だ。

「それはどういう事ですかッ!？」

「あなたは、佐倉丸様が死んで良かったとお考えかッ!？」

「それが上官の言葉かッ!」

怒り狂う陸軍艦魂達。しかし、神州丸は「それは違つてあります」と小さく首を横に振りながら答えた。

「……確かに、佐倉丸の死は辛いであります。彼女は、私の大切な部下だつたであります」

その言葉に、最上はうつむく……彼女の大切な部下を、この場にいる陸軍艦魂達の戦友を殺したのは自分なのだ。

「でも、これは仕方のない事です。戦場において、誤射なんて日常茶飯事。世界中の戦場では普通に起きる事です」

神州丸の言う通り、誤射なんてものは世界中で起きている。どんなに訓練を積んでも、どんなに技術が向上しても、それは決して消える事はない。

「確かに今回の誤射は我が方に甚大な損害が発生したであります。

でも、それは別に珍しくない事です。一方ですでに大半の部隊は上陸に成功しているであります。被害は出たありますが、結果的には作戦成功であります。私達は、任務を完遂したであります」「し、しかしッ！」

理性ではわかっているのか、隊長の言葉は震えている。神州丸はそんな彼女やその後ろで動揺する仲間達を諭すように言う。

「誤射による被害は、決して少なくはありません。でも、それ以上に私達は彼女達に感謝するべきであります。この作戦が成功したのも、敵艦隊の襲撃から守ってくれた彼女達海軍のおかげであります。彼女達がいなかったら、私達はただの洋上の的。全滅までいかなくても作戦中止になるくらいの損害は受けていたかもしれないであります。非情な言葉ではありますが、犠牲が最小限で押さえられたのは良かった事であります」

「司令……」

「私達は軍人であります。軍人は御国の為にその身を捧げる。決して感情に走ってはいけませんのであります」

神州丸の言葉に、ついに陸軍艦魂達は沈黙した。

皆頭では分かっているのだ。最上に当たった所で、何も解決はしない。完全な八つ当たりではない。でも、佐倉丸が『最上』の誤射で死んだ事は事実。その事実が、彼女達から冷静さを奪い、こうした強行に走らせてしまったのだ。

「私達は、亡き佐倉丸様の仇を……ッ！」

ついに泣き崩れる隊長。周りの陸軍艦魂達も少なくない人数で泣き出してしまった。

部屋には彼女達の泣き声が響き渡る。

名取や春風などの海軍艦魂達はその光景にただただ呆然とするのみ。どう対応したらいいものか困惑していた。

「神州丸……」

「最上。顔を上げるであります。あなたは、何も悪くはないであります。むしろ、私達を守ってくれた事、心から感謝するであります」

「で、でも……ッ」

「あなたのその無駄に強い責任感には苦笑するであります。私なら気にしてないであります。こうして一応元気なのでありますから……だから、泣かないでほしいであります」

しかし、最上は神州丸の腕の中でいつまでも泣き続ける。ここでやっと春風がやって来て化最上を預かった。最上は彼女の腕の中でより一層声を上げて泣く。どうやら泣き止むにはもう少し時間が掛かりそうだ。

「……司令官」

周りには聞こえないような声で神州丸は背後に立っている今村に声を掛ける。

「何だ？」

「……これで、良かったのでありますよね？」

「さあな。俺がどうこう言える問題でもあるまい。だが」

今村は一步步を進め、そとと神州丸の頭を撫でた。その温かさ、神州丸の口元に小さな笑みが浮かぶ。

「俺はお前の味方だ。お前が決断した事なら、俺はそれを信じて突き進むさ」

「はい……」

神州丸の仲裁のおかげで、陸海両軍の艦魂同士が互いに謝罪し、今回の暴動事件は幕を閉じた。双方共に中には徹底抗戦を主張するものがいたが、もはやその意義が失われている状態ではその意見が通る事は最後までなかった。

今後の事について相談し合う陸海軍の艦魂達を見詰め、神州丸は頬をちよつとだけ赤らめて小さくはにかんでいた。

その柔らかな髪を撫でる優しい手の存在を喜ぶように……

「今回の事は、誠に申し訳ありませんでした……」

今村の司令室に入って来た早々にそう言って頭を下げた原少将以下の第三護衛隊司令部幹部達。彼らは『最上』の誤射によって輸送

船団が大打撃を受けたと認め、こうしてわざわざ謝罪に来たのだ。

「まあ、詳しい話を聞こうじゃないか。まずは掛けたまえ」

そんな彼らの前でソファに腰掛ける今村は立ったまま頭を下げる原を対面のソファを勧める。しかし原はそれを断り、隣に立つ参謀長が今回の事件の真相を話した。だがすでに神州丸などから情報を得ていた今村は驚く事もせず、淡々とその説明に耳を傾ける。

そして、全ての真相を話した原達は改めて頭を下げて謝罪した。

原達の頭に、陸海軍の連携不可によるジャワ攻略作戦失敗という最悪の事態が過ぎる。それほどまでに、今回の事は許されるような事ではないのだ。

だが今村は必死に謝る彼らに向かってこう言った。

「なあに、誤射なんて珍しくはない。俺達陸軍なんかそれこそ日常茶飯事だよ。今回の事も仕方がない事だ。ミスをした君達に責任はあるだろうが、それを責める気はないぞ。むしろ君達のおかげで作戦は順調に進んでいる。こちらこそ礼を言う。このジャワまで送ってくれて感謝する」

今村の言葉に原達は驚愕し、彼の寛大な言葉に心から感謝した。それだけでも十分だというのに、今村はさらに原達に驚愕の提案を出す。

「どうだろう？　ここは海軍の面子を保つ為にも今回の事は私達だけの秘密とし、敵艦からの攻撃という風に報告するのは。なあに、現場にいた者にしかわかんよ。どうだ？」

何と今村は海軍側の誤射を抹消し、これを敵からの攻撃として報告しようとしたのだ。原達はただただ彼の寛大過ぎる言葉に感謝し、中には嬉しさの為か、それとも左遷されずに済んだからか涙を浮かべる者もいた。

ともかく、今村は海軍を責める事はせず、今回の事はなしとした。感謝しながら退室する原達を見送り、今村はソファに深く腰を下げた。そんな彼の隣にはずっとそのやり取りを見守っていた神州丸がいる。

「これで良かったのか？」

「はい、ありがとうございます」

そう、今回の海軍側を守るような提案は神州丸が進言したのだ。ただ単に最上をこれ以上責めたくはなかったというのもあるが、今までずっと見て来た陸海軍の不仲が少しでも改善される事に繋がるかもしれないという可能性を想つての事だ。

今村も最初こそは驚いたが、神州丸の強い想いと今後の事を考えて了承したのだ。

「まったく、お前にはいつも驚かされる」

「申し訳ないであります」

「まあ、それがお前らしいんだがな　　そういえば、怪我は大丈夫か？」

今村は頭や腕に見える部分だけでもかなり包帯を巻いている痛々しい姿の神州丸を見て訊く。平然としたような顔をしているが、神州丸の本体は大破しているのだ。かなりの大怪我のはずだが。

「まだ少し痛むではありますが、問題ないであります。浸水は最低限の部分で食い止めているでありますから、これ以上被害が拡大する心配もないであります」

「そうか。だが無理はするなよ」

「はいであります」

笑顔で答える神州丸に今村は小さく微笑むと原が来ていた時に淹れたお茶をすする。だが、残念ながら中身はすでに空っぽであった。「司令官、お注ぎするであります」

神州丸はまだ温かいお茶の入った急須を取って彼の湯飲みに注ぐ。「ありがとう」

湯気を立ち上らせる神州丸が注いでくれたお茶。今村はゆっくり味わうようにして飲む。

その味は、いつもよりずっとおいしく感じられた。

第六章 最上の涙 残された者達の想い（後書き）

という事で、今回は陸軍艦魂と海軍艦魂の激突編が終了しました。さらに今村の伝説と一つとなる海軍の名誉を守った虚偽報告編も混ぜてみました。

今村大將はジャワでの名占領やラバウルの要塞化がピックアップされる事が多いですが、僕はこっちの方が好きですね。

うーむ、なぜでしょう？ どうしても陸軍艦魂が悪役になってしまいますね。別に悪役でも何でもないのですが。

一部の陸軍艦魂の言動に不快な事を感じた方がいたら申し訳ありませんでした。

なぜか、書いていてふと従軍慰安婦が浮かんだので入れてみたのですが……あまり違和感ないですね。戦争だからでしょうか？

とまあ、何だかんだで神州丸編も次回で完結を予定しています。ですが、またも次回更新は未定です。

申し訳ありませんが、また気長に待っていてください。ではでは。

最終章 聖將と戦姫 互いの進むべき道（前書き）

何とか四月までに間に合いましたあッ！

四月はアニメの節目。なのでこの作品も四月をまたがせるのは気が引けたので慌てて書きました。

その為結構手抜きな部分が多いですが、今回は主に今村のその後みたいな感じの説明が多いですね。

では神州丸編の最終話、最後までよろしく願います。

最終章 聖將と戦姫 互いの進むべき道

第三護衛隊司令部幹部達が『神州丸』を後にしてからしばらくし、遅れに遅れていた第十六軍司令官今村均中将の上陸の時が来た。

座礁し少し傾いた甲板の上で、今村はそつと見送りに来てくれた神州丸の頭を撫でた。撫でられた神州丸は頬を赤らめながらムツとする。

「子供扱いは嫌いであります」

「そう言うなつて。俺は結構好きなんだけどなこれ」

「私は嫌なのであります」

「じゃあやめるか？」

「……こ、今回だけは大目に見るであります。な、撫でるであります」

顔を赤らめながら恥ずかしそうに言う神州丸に、今村はおかしそうに笑う。そんな彼の笑い声に神州丸はさらにムツとする。

「わ、笑わないでほしいでありますッ」

「つたく、素直じゃないなお前は」

「お、大きなお世話でありますッ！」

顔を真っ赤にさせて怒る神州丸だが、今村の手を跳ね除ける事はしなかった。今村も小さく苦笑し、そんな彼女の頭を優しく撫でる。頭を撫でられながら、神州丸はずっとこの時間が続けばいいと思う。だがそれは決して叶う事はない。今村にはこれから大変なジャワ攻略が待っているし、自分だって修理の為にドックに入らなければならぬ。修理が完了すれば、また輸送任務が待っている。

人間と艦魂の違いはあるが、軍人である限り自分の時間を作る事は難しい。特に二人とも司令職。その忙しさは通常兵よりもずっと上だ。

しばし頭を撫でられていた神州丸だが、突如スツと彼の手が頭から離れた。

「司令官？」

「時間だ」

今村の視線を追うと、参謀達がこちらを見ていた。どうやら上陸艇の準備ができたらしい。

彼が行ってしまう。神州丸の表情は一気に暗くなる。

「そんな顔するなよ。別れ辛くなっちまうだろうが」

今村は小さく苦笑しながら神州丸の肩をそつと叩いた。

「俺にはこれからジャワを占領する役目がある。お前にだって、艦^か体を直した後にだって任務があるだろう？ 仕方がないんだよ」

「わかつているでありますよ……」

「神州、元気だな。今までありがとう。お前の事は忘れないから」

「……なんか、死亡フラグが立っているであります」

「……不気味な事言っくなよ。冗談じゃすまないんだからな」

苦笑いする今村を見て、神州丸もプツと吹いて笑ってしまう。

「申し訳ないであります。でも、作戦が成功しても司令官が死んでしまえば意味がないんですからね。絶対に死んじゃダメでありますよ」

「わかつてるって。心配するなよ」

口元に小さな笑みを浮かべ、今村は足元に置いてあるアタッシュケースを持つ。それを見て、ついに彼が行ってしまうと不安になる神州丸。

「じゃあ、元気だな。行つて来る」

今村は軍帽を深く被り直すと、神州丸に背を向けて歩き出す。

だんだんと離れて行く彼の背中を見て、神州丸は思わず走り出し、彼の服の裾を掴んだ。

突然裾を掴まれた今村が不思議そうに振り返ると、彼女の不安そう^{うな}、今にも泣き出しそうな瞳と目が合った。

「神州？」

「約束で、ありますよ」

「うん？」

「生きてください。私は、司令官が生きていれば作戦の成否は問わないであります。だから、絶対に死なないでください。生きて、また私に会いに来てほしいであります」

必死に訴える神州丸に、今村は小さく口元に笑みを浮かべると、そつとその頭を撫でる。その彼の温かさに、不安という氷が溶けていくような感じがした。

「司令官……」

「約束だ。絶対に生きてジャワを攻略し、またお前に会うからな」

「……約束で、ありますよ」

「ああ、約束だ」

彼の言葉を聞いて安心した神州丸は、グシグシと涙を袖で乱暴に拭い取ると、自分にできる精一杯の笑顔を浮かべる。

「絶対に、約束でありますよッ！」

空の向こうが薄らと明るくなって来た夜明けの時、今村は神州丸に見送られてジャワの地に降り立った。

洋上に浮かぶ『神州丸』を見詰め、小さく手を振る。

「元気でな」

今村はそう小さくつぶやくようにして言うと、すでに設営されていた司令部に乗り込む。だが『神州丸』被弾の際に無線機が海没したので、しばらく司令部としての機能は失われてしまっていたが。

任務を終えた第三護衛隊と輸送船団はジャワを離れた。残された今村中将以下の第十六軍は一路ジャワを占領するイギリス・オランダ軍を目指して進軍を開始した。

そして、ここから聖将今村の伝説の数々が始まった。

全兵力を三支隊に分けた第十六軍は各地に一斉攻撃した。しかし連合軍も日本軍の進撃ルートを予想しており、道路や橋を徹底的に破壊してその進撃を阻害する。

だが第十六軍は犠牲を払いつつも橋を修理しながら進撃を続け、

五日には第三支隊が首都バタビアを占領。六日には世界一の植物園と言われたボイテンゾルグを第一支隊が占領した。

さらに同時期に中心都市スラバヤに進撃を開始。士気、火力、兵力で圧倒する第十六軍は蘭印軍を圧倒。一部を降伏させる事に成功した。

さらに若松満則少佐率いる第一挺身隊はカリヂャチ飛行場も一時間の交戦の末に少数精鋭斬り込み隊が迂回して側面から敵司令部に強襲。これを占領して日章旗を掲げた。

しかし蘭印軍も反撃を開始。バンドン要塞から機甲部隊を発進させて飛行場に強襲を仕掛けた。だが若松隊とすでに進出を終えていた飛行隊の活躍で何とかこれを退ける事に成功するが、若松は平地である飛行場を少ない戦力で守り切る事はこれ以上不可能と判断。敵兵力五万が予想されるバンドン要塞一角を占領し、そこで防御戦を行う事を決定した。

七日、若松隊はバンドン要塞外郭のレンバンへ電撃突入。見事山頂線重要陣地を占領した。

この若松隊の突入は蘭印軍を驚愕させた。要塞はまだ守備を固めている最中だったのだ。わずか数百名のみで突入するはずはなく、背後に大部隊が控えていると誤認。あっけなく若松隊に降伏した。

交渉の末に蘭印軍は全面降伏を受け入れ、陸軍記念日である三月十日に第十六軍はバンドン要塞に入城。十二日に最後の連合軍部隊が降伏し、完全占領となった。

今村率いる第十六軍の進撃はすさまじく、当初の予定よりも一ヶ月も早くジャワを占領した。

ジャワ島においての連合軍の捕虜は八万名にも上った。

その後、今村の神がかり的な占領政策が行われた。

占領と聞くと占領地の人間には自由がなく強制労働や略奪が当然。治安は悪化するというイメージがあるが、今村の占領政策は明らかに違った。

オランダ軍に捕らわれていたインドネシア独立運動者を解放し、

その活動を援助。諮詢会しじゅんかいの設立や現地民の官吏登用等独立を支援。さらに軍政面においては敵が破壊した石油精製施設を復旧させてオランダ統治時代の半額で売り出し、略奪等の厳禁を命じて治安維持にも努め、現地民との友好的な占領を行った。

戦局が悪化した際、日本政府は不足する衣料を確保する為にジャワで生産される白木綿の大量輸入を命令するも、今村はこれを拒否。一時日本政府と対立する事となった。

今村はこの状況下での現地民への圧迫を許さず、死者を白木綿で包み埋葬する彼らの宗教心を傷つけないという想いで抵抗であった。

政府は今村を激しく非難したが、ジャワでの彼のすさまじい占領政策などを見て諦める事となった。この時のジャワは親日反蘭で民族が一致し、治安や生産状況も極めて良かったのだ。

しかし大本営はこの今村のやり方を不服とし、彼の親しい部下を呼び出して叱責した。

その後今村は一九四二年の十一月にラバウルに着任。トランプ仲間で親しかった山本五十六海軍大将と再会した。だがその山本は彼が指揮するラバウルから前線偵察に飛び立って戦死。今村は泣いて彼の死を悲しんだ。

今村自身山本の少し前に同じような状況で偵察飛行をし、敵に襲われたが何とか逃げのびる事に成功していた。

戦局の悪化からラバウル周辺の島々は次々に米軍に占領され、今村は補給は長く続かないと判断。ガダルカナル島の悲劇を繰り返さない為にも島内に大量の田畑を作るように全軍に命令し自らの手で耕し、自給自足を可能とした。さらに敵の空襲や上陸に対して強力な地下要塞を建設。日本軍最強の要塞を造り上げた。

今村の見事な、あまりにも強力な堅牢さにダグラス・マッカーサー陸軍大将以下米軍司令部はラバウルの占領を諦め、迂回して補給を断って日本軍を餓死させる飛び石作戦を行うが、ラバウルは自給自足が可能だった為に作戦は失敗。ラバウルはその後も占領される

事はなく終戦を迎える事となった。

終戦後、今村は戦争指導者として連合軍の軍法会議に掛けられ、オーストラリア軍の裁判によって死刑が宣告された。しかしジャワなどの彼が指揮した地において彼の死刑反対運動が勃発。当時インドネシアでは日本軍の占領によつオランダ軍政策は崩壊し、再度占領しようとするオランダ軍に対するインドネシア独立戦争が起きており、オランダ軍はこの運動が悪化して独立運動に繋がる事を恐れて、彼を禁固十年に減罪した。

ちなみにこの独立戦争には旧日本軍の兵士達も参加し、国際社会から非難を受ける事となったが、これがインドネシアでの親日感情を高め、今でもインドネシアは親日国となっている。

その後今村は一九四九年に巣鴨拘置所に送られるも、元部下達を南方に置いて自分一人だけ東京に戻る事を嫌い、妻を通しマッカーサーにマヌス島刑務所への入所を直訴。マッカーサーは彼を賞賛し、彼こそ真の武士道を持つ侍と賛美してその要求を受け入れた。

その後刑期満了で日本に帰国した今村は戦争責任を反省し、ひっそりと質素な生活を送り、回想録を出版し、その印税は全て戦死者や戦犯刑死者の遺族に使った。

また援助を求める元部下に対しても精一杯の援助をしたとも言われ、例えばそれが騙されているとわかっていても、彼は援助した。戦時中常に死地への突撃を命令していた罪の意識からの行動と言われている。

そして一九六八年十月四日に死去。享年八二歳であった。

一方、バタビア沖海戦で大破した『神州丸』はその後早速修理を行われ、一九四三年十月に修理を完了し、その後は輸送任務に従事する事となった。

しかし一九四五年一月三日、昨年のレイテ沖海戦で敵地となったレイテ島への輸送任務の帰路、台湾の高雄沖にて米軍機動部隊の攻撃を受け大破放棄。その後漂流している所を米潜水艦『アスプロ』

に雷撃されて沈没した。

今村と神州丸の約束は、結局叶う事はなかった。

聖将今村と戦姫神州丸。

天国において二人は再会できたのか、それはわからない。
だが、もし再会できていたとしたら……

「約束を破ったでありますねッ！」

「す、すまんッ！ これには事情があつて」

「言い訳無用でありますッ！ 成敗するでありますッ！」

「許してくれえッ！」

「待つでありますッ！」

二人の絆は、きっと今も繋がっているのだろう。

最終章 聖將と戦姫 互いの進むべき道（後書き）

《神州丸》 しんしゅうまる

神州丸型揚陸艦一番艦 揚陸艦『神州丸』

出身 播磨造船所（兵庫県）

身長 156cm

髪型 セミロング（かなりのクセツ毛）

実年齢（1942年3月現在） 8歳

外見年齢 13、4歳

誕生日 11月15日

家族構成 なし

好きなもの 日本・帝国陸軍・甘いもの・日向ぼっこ
嫌いなもの 敗北・全滅・からかわれる事・バカにされる事・雨の日

艦魂年代史シリーズ初の陸軍艦魂メインキャラで揚陸艦『神州丸』の艦魂。当時陸軍は戦争になっても海軍の援護を信用せずに自軍独自で護衛も兼ねられる特務船を建造していた。『神州丸』はその一隻。完成当時は航空機を搭載できる、現在で言う強襲揚陸艦だったが、航空機の飛躍的な性能向上によって航空機運用が不可能となった。しかしそれでも陸軍随一の強力な揚陸艦には違いない。そんな『神州丸』の艦魂は「〜であります」という特徴的な口調で、かなり真面目な女の子。仕事はきっちりとし、生活態度も良くてかなりのしっかり者。今村の事が気になるようだが、素直になれずにいる。

《三隈》 みくま

最上型重巡洋艦二番艦 重巡洋艦『三隈』

出身 三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長 154cm

髪型 ツインテール

実年齢（1942年3月現在） 7歳

外見年齢 10、11歳

誕生日 8月29日

家族構成 姉・最上 妹・鈴谷・熊野

好きなもの 最上・お菓子・遊ぶ事・楽しい事・お昼寝

嫌いなもの 怒られる事・楽しくない事・退屈な事

最上の妹、重巡『三隈』の艦魂。最上に溺愛されており、最上に懐いている。本編には登場していないが名前だけは最上の話の中で登場している。最上の宝物。本編キャラの日向や隼鷹などと同じ妹系キャラで、設定もあまり変わらない。幾分か二人よりはわがままではない程度。

《春風》 はるかぜ

神風型駆逐艦三番艦 駆逐艦『春風』

出身 三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長 164cm

髪型 長髪

実年齢（1942年3月現在） 18歳

外見年齢 22、3歳

誕生日 5月31日

家族構成 姉・2人 妹・6人

好きなもの かわいい後輩・楽しい事・みんなの笑顔・からかう事

嫌いなもの 厳しい先輩・命を軽んじる者・みんなが悲しむ事

駆逐艦界のお姉さんキャラ。古参組の駆逐艦で優しく容姿も美しい為に多くの駆逐艦魂達から慕われている。長門や比叡とも腹を割って話せる仲。平時の休日は着物を着ていたが、戦争が始まってしまい彼女の着物姿は見れなくなってしまった。自分はこの戦争で死ぬと覚悟していたが、『春風』は終戦まで生き残る。その後は軍艦防波堤としてその駆逐艦としては長い歴史を終える。

《吹雪》
ふぶき

吹雪（特1）型駆逐艦一番艦 駆逐艦『吹雪』

出身 舞鶴海軍工廠（京都府）

身長 158cm

髪型 ポニーテール

実年齢（1942年3月現在） 13歳

外見年齢 14、5歳

誕生日 8月10日

家族構成 妹・9人（特型全てを含めれば二三人）

好きなもの 妹達・日本・帝国海軍・休日の読書・妹達と暮らす時間

嫌いなもの 欧米列強・帝国陸軍・志に反する者・邪魔をする者・妹達を傷つける者

建造当時世界各国を震撼させた特型駆逐艦の一番艦、駆逐艦『吹雪』の艦魂。短めなポニーテールと細メガネが特徴的で、自分の信ずるものの為なら多少の違法行為をしても叶えるという志を貫く少女。言い方を悪くすれば融通が利かない子。しかし真面目で仕事熱心なので仲間や先輩からも信頼されている。特型駆逐艦は一応分類されているが一つの姉妹のようなもので、吹雪は二三人にも及ぶ特型姉妹の長女となる。妹一人一人に目を掛けており、小さな変化も見逃さずに相談に乗ってくれるいいお姉さんでもある。

《敷波》
しきなみ

綾波（特2）型駆逐艦二番艦 駆逐艦『敷波』

出身 舞鶴海軍工廠（京都府）

身長 162cm

髪型 長髪

実年齢（1942年3月現在） 12歳

外見年齢 16、7歳

誕生日 12月24日

家族構成 姉・綾波 妹・8人

好きなもの 煙草・休日・楽な事

嫌いなもの 煙草のない生活・煙草が切れる事・禁煙区域・めんどうな事

艦魂年代史シリーズを通して唯一の喫煙艦魂。煙草がないとイライラするし集中できないというニコチン中毒状態だが、艦魂なので肺ガンなどは心配する必要はない。好きな銘柄は国内高級煙草の《敷島》。艦魂キャラの中でも結構なめんどくさがり屋だが、やる時はやる子。仲間内からは喫煙者という事で煙たがられており、内心ちよっと傷ついている。何度か禁煙をしようと思ったがそのたびに挫折しており、今も喫煙中である。食後の一服が何よりもおいしいらしい。

作者「えっと、まずは後半に更新が遅れてすみませんでした」

神州丸「本当であります。一体どれだけの人に迷惑を掛けたでありますか」

作者「め、面目ない」

春風「まあいいじゃないですの。ちゃんと完結できたのすし」

最上「だが、迷惑を掛けたのは事実だ」

作者「うう、本当に申し訳ない。春休みだからといって調子に乗って無計画でモンハンと両立させようとして失敗してしまった……」

神州丸「海軍講習も止まったままであります」

作者「あれは、もしかしたら更新が凍結されるかもしれない」
最上「ど、どうしてよッ!？」

作者「純粹に忙しいってのが理由だけだ」

神州丸「そんな無責任な理由は通じないでありますッ! さっさと書くでありますッ!」

作者「いや、明日から大学始まるし」

三隈「一年生になつたら」

最上「いや、それ違うから」

作者「まあ、明日からの予定なんて全然わからないからね。もしかした当分の間艦魂の方がご無沙汰になるかもしれないし。モンハンの方もどうなる事やら」

春風「まあ、正当な理由がありますし、そう頭ごなしに責めるものじゃないですわよ」

最上「むう……」

神州丸「それにしても、最終話はかなり簡単に終わったでありますね」

作者「え？ あ、うん。どうせ書くとしたら今村大将の軌跡くらいだったし、何とか三月中に終わらせたかったから。ほら、区切りもいいし」

神州丸「あなたの個人的な事で私と司令官の物語をあんなに簡単に終わらせないでほしいでありますッ！」

作者「いや、だって今村大将は実在の人物でしょ？」

神州丸「それがどうしたでありますかッ!？」

作者「今村大将、奥さんいたし」

神州丸「ぐはあ……ッ！」

春風「そうですねえ。実在の人物はあまりいじめませんもの。フラグを立たせたくても既婚者が多いですしね」

三隈「フラグ？」

最上「あなたはわからなくていいの。決してわかちゃダメ」

作者「まあね。だから僕もヘタにいじめないんだよ。ごめんね神州丸」

神州丸「別にいいじゃないですかッ！ この物語はフィクションであり実在の人物団体とは一切関係ないでありますッ！」

作者「身も蓋もない事を言うなッ！」

春風「それで、これからどうするおつもりですか？」

作者「さつきも言ったけど、4月からのスケジュールが全然不明だ

からそうなるか未定だね」

春風「そうですねえ、新作アニメもずいぶんありますものね」
作者「いや、それもあるけど……」

春風「待ちに待った甲斐があったわね、ハルヒの第二期」

作者「う、うん」

春風「ハヤテの第二期」

作者「ま、まあね」

春風「真恋姫無双、秋季アニメ化決定」

作者「あれは嬉しかったなあ……。できれば前みたいなヒロインばかりじゃなくて原作のようにハーレムアニメにしてほしいけど」
三隈「ねえ、何の話してるの？」

最上「あなたはいいのッ！ 絶対に関わっちゃダメッ！」

春風「じゃあ、そんな春を楽しもうとしているあなたを地獄のどん底に落としますわよ」

作者「え？」

春風「frispide解散状態」

作者「やめてえッ！ 忘れようとしてたのにいッ！」

三隈「ねえ、何で作者さんが悶絶してるの？」

最上「見ちゃダメよッ！ 関わっちゃダメッ！」

神州丸「何やってるでありますか……」

春風「まあ、あまりはしゃぎ過ぎないように程々にしなさいね」

作者「……はい」

神州丸「私達、こんな人の妄想から生み出た存在なのでありますね……」

最上「言わないで神州丸。自分の存在を否定したくなるから」
三隈「？」

春風「まあ何はともあれ無事に完結できて良かったですわ」

作者「ごめんなあ、心配させちゃって。でも何とか完結できたし、これもみんなのおかげだよ」

神州丸「まあ、一応作者でありますからね。感謝はしているであり

ます」

作者「……神州丸って、いつの間にツンデレ属性が入ったんだろ」

神州丸「わ、私はツンデレなんかじゃないでありますッ！」

三隈「ねえ、ツンデレって」

最上「いいのよあなたはッ！ 忘れなさいッ！ 教育衛生上極めて劣悪な情報なんだからッ！」

春風「ツンデレっていうのは永久凍土が続く降水量の少ないシベリア北部地域の事で」

最上「それはツンドラよッ！ 妹に間違った知識を与えないでッ！ 春風「じゃあ正しい知識を教えてもいいんですの？」

最上「そ、それはもつとダメええええッ！」

三隈「???」

作者「お、そろそろ時間だな。では明日からついに大学生になる黒鉄大和ですが、これからの事は神のみぞ知る領域。果たして皆さんの前に再び舞い戻って来れるのか」

神州丸「まあ、無理でありますね」

最上「無理ね」

春風「残念ですけど」

三隈「？」

作者「お前ら、もう少し作者をいたわれよ」

神州丸・最上・春風『無理（であります）』

作者「……」

三隈「えつと……」

神州丸「じゃあ作者さんが絶望に打ちひしがれているので私が続けるであります。今回は本当に未定で、ご迷惑をおかけするであります。でも必ず戻って来るので、それまで皆さん体調に気を付けて元気にしててほしいであります。では皆さん、私の物語を最後まで読んでくれて感謝するであります。またどこかでお会いするでありますッ！」

春風「私達の戦いは、まだまだこれからよッ！」

作者「やめてッ！ ものすごく最終回っぽいような事を言うのはやめてッ！」

神州丸「はぁ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3523g/>

艦魂年代史外伝 ～陸海軍の絆 共に歩むべき道～

2010年10月8日14時56分発行